ALPS ブックレット シリーズ ▶▶▶ Vol.6

新型コロナ禍の下での教育・学修支援

－新入生への支援に留意して－

アカデミック・リンク 教育・学修支援専門職養成プログラム
ACADEMIC LINK PROFESSIONAL STAFF DEVELOPMENT PROGRAM for EDUCATIONAL and LEARNING SUPPORT

千葉大学アカデミック・リンク・センター
教育関係共同利用拠点
（教育・学修支援専門職を養成する実践的SDプログラムの開発・運営拠点）

ALPSブックレット シリーズ
Vol. 6

ALPSプログラム 第6回シンポジウム

新型コロナ禍の下での教育・学修支援

―新入生への支援に留意して―

千葉大学アカデミック・リンク・センター

教育関係共同利用拠点
（教育・学修支援専門職を養成する実践的SDプログラムの開発・運営拠点）

は じ め に

ここに令和２年度のALPSシンポジウムの成果をお届けします。

千葉大学アカデミック・リンク・センターがALPSシンポジウムを最初に開催したのは、当センターが教育関係共同利用拠点として最初の認定を受けた平成27年でした。早いもので今回で第６回目となります。今回は新型コロナ禍の下で、シンポジウムとしては初のオンライン環境での開催となりました。テーマも「新型コロナ禍の下での教育・学修支援―新入生への支援に留意して―」というもので、コロナ禍の中で、われわれの活動の原点に立ち返るような課題設定となりました。

昨年来、新型コロナ禍において、多くの教職員が、「いかに学生の学びを途絶えさせないか」を考えて様々な努力を重ねてきたと思います。それは私たちアカデミック・リンク・センターも同じでした。とりわけ、キャンパスライフをいきなりオンライン環境で始めなければならなかった新入生にとっては、オンライン環境での学びがリアルなキャンパスでの学びとどれくらい違うのかすらわからないまま、大きな戸惑いの中での学生生活、大学での学びのスタートであったろうと思います。教育・学修支援の専門職にとっては、正にその存在意義が問われるような状況であったわけですが、実際には、どうしたらいいのかと戸惑うことが多かったように思います。

今回のシンポジウムでは、そのような新入生に留意しつつ、コロナ禍における教育・学修支援はどうあるべきか、ということをテーマとして取り上げました。これには何か決まった正解があるわけではありませんが、様々な経験を積まれ、幅広い視点でこの問題について論じていただける田中岳先生（東京工業大学教育革新センター副センター長・教授）、高石恭子先生（日本学生相談学会理事長・甲南大学教授）のお二方にご登壇いただき、そのご見識に触れることができました。質疑応答においては、参加者の皆さんも交え、大変活発にご議論をいただき、喫緊の課題に関して様々な経験が共有されました。

ここにその成果をブックレットとして刊行することで、当日ご参加いただけなかった方々の参考になれば幸いです。

本拠点の活動に引き続き皆さま方のご支援を賜りますようよろしくお願いします。

令和３年３月

千葉大学アカデミック・リンク・センター長
竹内　比呂也

目　　次

はじめに

目次

プログラム

挨拶・趣旨説明 …… 7

千葉大学副学長、附属図書館長、アカデミック・リンク・センター長、人文科学研究院教授
竹内　比呂也

第１部：講演

●講演１

新型コロナ禍における学生相談 …… 10

甲南大学教授、日本学生相談学会理事長　高石　恭子 氏

はじめに …… 10
１．コロナ禍での大学生の心理状態 …… 13
２．新入生の置かれている状況 …… 17
３．今後求められる学生支援 …… 19
４．まとめ …… 21
５．資料① …… 23

●講演２

COVID-19であらわになった日本の大学教育 …… 30

東京工業大学教育革新センター副センター長・教授　田中　岳 氏

はじめに …… 30
１．実は既にコロナ禍だった …… 32
２．コロナ禍の真っただ中へ …… 34
３．経験を経て：大学教育への私見 …… 36
４．資料② …… 43

第２部：パネルディスカッション

パネルディスカッション …… 58

千葉大学ALPSプログラム　第６回シンポジウム

新型コロナ禍の下での教育・学修支援

－新入生への支援に留意して－

日 時：2020年10月28日（水）15：00～17：15
会 場：Zoomによるウェビナー形式での開催

プログラム

司会：竹内　比呂也（アカデミック・リンク・センター長）

15：00　挨拶・趣旨説明　竹内　比呂也

15：05　講演１「新型コロナ禍における学生相談」
高石　恭子 氏（甲南大学教授、日本学生相談学会理事長）

15：45　講演２「COVID-19であらわになった日本の大学教育」
田中　岳 氏（東京工業大学教育革新センター副センター長・教授）

16：25　休憩

16：40　質疑応答

17：10　まとめ

17：15　閉会

挨拶・趣旨説明

千葉大学副学長、附属図書館長、
アカデミック・リンク・センター長、人文科学研究院教授
竹内　比呂也（司会）

皆さん、こんにちは。ただいまからALPS第６回シンポジウム「新型コロナ禍の下での教育・学修支援―新入生への支援に留意して―」を開始いたします。私は千葉大学アカデミック・リンク・センター長の竹内です。よろしくお願いします。

本日は大変多くの方にご参加いただき、まことにありがとうございます。二百数十名の方からお申し込みをいただき、現時点で170名強の方にご参加いただいています。大変多くの方にご参加いただいたことを大変ありがたく思っています。

本日は、私どものシンポジウムとしては初めての試みですが、Zoomによるウェビナーの形式による開催となりました。ご承知のように、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、このようなシンポジウムのみならず、大学の授業の多くが遠隔授業のスタイル、つまりオンラインでの授業に移行しました。もちろん、今日（こんにち）対面授業の再開が社会的には強く要請されていますが、とはいえ、新型コロナウイルス感染症への対策といったことで、多くの大学がさまざまな対応に追われているのが現状だと思います。

今年５月の段階では、９割の大学が遠隔授業を実施する状況になっており、そのときには、多くの大学でキャンパスへの入構を制限するということがありました。このような措置がなされたことで、多くの学生たちがキャンパスライフが見えないまま勉学を続ける状況になったと考えています。後期からは多くの大学が対面授業を実施しています。また大学のキャンパスに新入生たちがようやくやってきて、新たなキャンパスライフを始める状況になってきました。

このような状況のもとで、特に新入生たち、あるいは学生たちは今どういう支援を必要としているのか。本日は、お二方の講師の先生方と皆様方からの質問を踏まえて議論することができればと考えています。

本日は、東京工業大学教育革新センター副センター長の教授の田中岳先生、及び日本学生相談学会理事長であり甲南大学教授の高石恭子先生のお二方を講師としてお招きし、新型コロナ禍の下での大学教育の実際、初年次教育の観点から見た課題などについて、また新型コロナ禍における学生相談、新入生が抱える課題についてご講演をいただきます。

大変ホットな話題で、かつ多くの参加の皆様にも極めて切実な問題とご認識いただいていると思います。私も両先生のお話を伺うことを大変楽しみにしています。今から2時間ちょっとの時間ですが、よい時間を送れますよう、私ども事務局も主催者として最善の努力をしようと思っています。皆様方にも円滑なシンポジウムの運営にぜひご協力をいただきますよう、よろしくお願いします。

第　1　部

講　演

［講演１］

新型コロナ禍における学生相談

甲南大学教授、日本学生相談学会理事長
高石　恭子氏

はじめに

今日は、十数年前千葉大学さんにこういったセミナーにお招きいただいて、学生支援のお話をさせていただいて以来だと思います。まさかこういう形でお話しさせていただくことになろうとは、そのときには想像だにしませんでした。今日は、こういう機会をいただいてありがたく思っています。私からは、「新型コロナ禍における学生相談」ということでお話をさせていただきます。

先ほどは学生相談学会の理事長ということでご紹介いただきましたが、今日は、それよりは主に関西の一私立大学の学生相談室でカウンセラーをしている立場で経験してきたことの中から、思うことを幾つかお話しできればと思っています。

このような流れでお話をさせていただきます**【資料①-2】**。私の専門が臨床心理学ですので、その視点も少し交えながらお話ができるといいなと思います。

甲南大学は、８学部ある文理総合型の大学です。神戸のちょっと郊外、住宅街の中にある、学生数9,000人ぐらいのコンパクトな大学です。甲南大学は神戸で阪神・淡路大震災を経験しており、この３階建ての建物は震災復興の一環として建てられました。当時は、全国的にも珍しいということで、結構いろいろなところから視察に来られました。

真ん中に水庭があり、右側が学生相談室、左側が地域の方に向けた相談室になっていて、１階全体が心のケアのためにつくられた建物です。ふだんは、年間で延べ3,000～4,000件ぐらいの利用があり、比較的親しみを持って学生さん、教職員の方、保護者の方に活用していただいている場所ではないかと思います。

私はここで学生相談の専任カウンセラーをもう30年以上務めています。震災前はもっ

と小さなところでやっていましたが、もう長く、同じところでお仕事をさせていただいています。

例年もここは比較的隠れ家的な静かな場所ですが、今年は本当に静かでした。４月の緊急事態宣言が出るあたりで学生の入構禁止になって、さらに人が少なくなったということはあります。私どもとしては、やはり学生が来て対面で相談できる機会は何とかして守りたかったので、緊急事態宣言が出そうだということがわかった段階で、学園の対策本部に交渉に行き、学生相談だけは閉じずにずっと対面で活動させていただきたいということで許可を得ました。

その結果、学生さんの入構禁止の通告が出たときに、以下の三つの場合だけが例外として認められました。一つ目は、大学に置きっ放しになっている荷物を引き取りに来るのはよろしいと。二つ目は、馬術部があるので、その馬の餌やりに来るのは許可しますと。三つ目は、学生相談室のカウンセリングを予約して来る場合は来てよろしいということで、三つ目の例外に入れていただきました。

馬の餌やりの次かと笑いながら言ったんですが、とはいっても、ドロップインといいますか、学生さんたちがふらっと来られないということは非常に深刻な問題でした。例年、４月５月には新入生さんが大勢やってくるので、それが受け入れられないということはとても残念でした。

おもしろいことに、人がソーシャル・ディスタンシングを行うと何が起きたかというと、動物たちが近づいてきてくれました。５月か６月、春をちょっと過ぎたあたりでしたが、先ほどの水庭に置いてあるプランターの日陰をちょっと見てみると、カエルがひょこっと昼寝をしていました。初めてのことでした。皆さん、何だかおわかりになりますか。何だろうと思って水庭に探索に出かけたところ、見つかったのがモリアオガエルの卵の泡でした。モリアオガエルは兵庫県では絶滅危惧種に入っているので、おーっということになって、付近を捜索したら、このような美しいカエルがいて、私たちはとても癒やされました。

水庭の中には、あと、トンボなどもやってきました。今日は音をお伝えできませんが、先ほどの建物が割と山際にあるので、ふだんだったら新学期でばたばた忙しくしていてほとんど気がつきませんが、窓をあけなさい、換気をしなさいということで、あちこちの窓を全開にしていると、ウグイスやセキレイなど、鳥の美しい声が聞こえてきます。あ、こんな音が聞こえている場所だったんだということを、改めて思いました。

学生相談室がここにあるということ、そしてどうやって活用してもらったらいいかを

何とか発信したいということでちょっと策を練りました。若手のカウンセラーの方の作成により、新型コロナウイルス特設サイトというものを設けました。全学の学生の皆さんへということで、少しずつコンテンツを足していっています。施設をどうやって利用したらいいか、どんなカウンセラーがいるか、どんなサービスが受けられるかということを、動画で撮って配信しました。

10月のここ数日前のカウンターを見ていると、7,521と出ています。本学は9,000人規模の大学ですので、学外の方にも見ていただいているとは思うんですが、リピーターの方もいて、ある程度の効果は出せているのではないかと思っています。

このような特設サイトをゴールデンウイーク明けに開設したところ、執行部の方も学長も、これはいい試みではないかと思われたようで、６月になると大学のウェブサイトのトップページにバナーをつくってくださって、保護者の方もここから見つけて活用しやすい体制をつくっていただきました。

前期はこういうことをやりながら過ごしつつ、あとは予約でカウンセリングに来られる対面の方、それから電話相談、そして先ほどからお話に出ているZoomを用いたビデオ通話のカウンセリング、大体その三択で活動を続けていました。

甲南大学の対応の過程ですが、主立ったものをざっとここに挙げさせていただいています**【資料①-3】**。一つ一つ読み上げることはもういたしませんが、私立の中規模大学であることを考えると、まあまあ標準か、少し早めに対応できたかなというところではないかと思っています。

３月半ばには新学期の授業対策会議が設置され、通常は４月６日から前期が始まりますが、２週間おくれて４月20日からウェブ活用授業開始が、３月23日の段階で決定していました。本学にも学習支援センターのような組織はありますが、ここから３月末にかけて、ウェブラーニングとかこういった遠隔授業の指導のできる若手の先生方と職員の方々は、恐らくほとんど不眠不休でご準備くださったのではないかと思っています。

この表の下のほうを見ていただくと、９月25日から後期が再開しています。ここで見ていただきたいのは、対面授業実施予定率が10月７日時点で76.1％と出ています。大体４分の３ぐらいが対面になっています。

ただ、数字だけで言えないなと思うのは、学部によって格差がかなりあるからです。理系の比較的小さな学部では100％対面になっています。夏休みぐらいから、もう皆さん来て、対面で実験をやっています。一方、文系学部で社会学系の大講義の座学が多い学部では、やはりゼミ以外は全部遠隔という学部もあるので、平均するとこうなるとい

う状況になっています。いろいろなところで学生さんたちの入室定員が設定されていますが、かなりの割合の学生さんがマスクをしながら今大学に来られているという状況が戻ってきています。

あとは学生相談室の利用状況ですが、前期は対面の相談、遠隔の相談も含めて、個別の対応が例年の９割ぐらいで、いつもよりは若干少なかったです。グループ活動は休止されていたので、そういった形での利用はありませんでした。後期になって授業が対面実施になってからは、グループ活動も再開しています。本来であれば前期に相談に来たほうがよかった要支援の学生さんたちが押し寄せてきているので、今はもう毎日新たな相談の申し込みがあります。月に２回ほど精神科医の先生も相談員として入ってくださっていますが、例年と違うのは、２カ月先まで予約がいっぱいでとれない状況になっているところです。これは今年の新たな傾向です。

カウンセラーのほうの相談対応件数は、今、大体1.5倍ぐらいまで来ているかなという状況で、例年よりも、前期に来られなかった学生さんたちが悪化してから来られているというところで、ちょっと深刻な相談もこのところ多いなという印象を持っています。一口に大学と言っても、首都圏あるいは関東の大学の雰囲気と、関西のちょっと郊外の大学の雰囲気ではかなり多様であることが、比較でおわかりいただけたのではないかと思います。

さらに申し上げますと、私たちはモリアオガエルと遭遇してとても興奮して、いろいろな大学のカウンセラーの先生に自慢したと先ほど申し上げましたが、もっと田園地帯の中にある大学にいらっしゃる先生などは、何も珍しくないよ、今もカエルがうるさくてしようがないんだけどみたいな感じでした。そこでもまた、本当にコロナ禍の大学はさまざまだなということを実感させられたようなエピソードもありました。

1．コロナ禍での大学生の心理状態

コロナ禍で学生さんたちがどんな心理状態を経験しておられるかですが**【資料①-4】**、今回のコロナ禍は、大震災なとど匹敵する自然災害として、私たちの心と生活にかなり長期的な影響を与えると考えられます。

最初にも申し上げましたが、甲南大学は阪神・淡路大震災を経験しているので、何となく、直感というんですか空気感というんですか、１月にはさすがにそこまで感じませんでしたが、２月後半ぐらいになってくると、あ、これは震災のときと似ているなと強

く思いました。これからもう何年にもわたって、私たちは長期的に対応を迫られるなと。ショックな出来事があると、その直後は皆さんともに手を携えて乗り越えようという、被災後のハネムーン期というものがあります。それが大体終わって、それぞれの個別の事情が明らかになってくるあたりから、いずれ数カ月たったら私たちカウンセラーの出番が来るぞと、それに備えて覚悟しておかなければと思いました。

ただ、コロナ禍における喪失とトラウマ、心の深い傷つきは、震災のときは大勢の方が瞬時に命を失ったり生活を奪われたりして、ある程度客観的にも共有できる被災、被害がありました。しかし今回はそうではなく、目に見えない、どこにいるかわからない敵とじわじわ戦うというところでの体験になるので、傷つき方、何を失っているかというあたりも一人一人違うし、見えにくい、共有しにくい、共通理解しにくいというところが違うと思いました。

コロナ禍で学生がどんな影響を受けたかを、もう少し具体的にお話ししていきます**【資料①-5】**。学生さんは本当にさまざまな体験をされていたと思います。春ごろにいろいろ話題になっていましたが、当時の４回生だった方は内定が直前になって取り消された、４月から留学に行く予定だったのが突如中止になった、部活動や試合が中止になり延期になり、アルバイトが中断し経済的に逼迫し、友人と会えなくなった。このあたりももう一つ一つは読み上げませんが、本当にいろいろな体験をされました。

特にカウンセラーに見えてきたのは、もともとご家族の関係がそれほど円満ではない、あるいは崩壊家庭のようなところで何とか生き延びてきた学生さんたちは、ずっと家にいなさいということで、家族間での傷つきが非常に深まってしまいました。時には家庭内暴力の被害を受けてどこにも逃げ場がないという、とても深刻な例も出てきました。

こういった経験をする中で、深刻なトラウマを負った学生さんたちにとっては、それらを乗り越えるためには長い年月と他者の支えが必要であるということ。そしてこれほどの特別なトラウマ体験がなくても、これは本当に何度強調してもし切れないぐらいですが、全ての学生さんは、本来あるはずだったキャンパスライフを喪失したという喪失体験の渦中にあります。私たち教職員はそのことをしっかり意識して受けとめておく必要があると思います。

本学でも遠隔授業が２週間おくれて始まりましたが、遠隔授業を受けることで学生さんたちが失った、あまり気づかれてはいないけれども実はとても大切なものがあります**【資料①-6】**。雑談とか余韻とか何かのついでとか偶然の遭遇とか、そして異文化とか

異なるものの交差（クロッシング）、そういうことも遠隔ではやはり起こりません。

前期、教員も職員もみんな、遠隔授業を何とか学生に届けようと思ってとても頑張ったので、学生さんたちも頑張ってそれを受け取ってくれて得たものはたくさんあったと思います。まず、地理的制約からの解放ということでは、遠距離通学していた学生さんたちはその分の学習時間が確保できたり、心身の制約からの解放ということでは、障害や病気で通学がなかなか困難であった学生さんは、なれ親しんだ環境の中で、自宅で落ちついて学習できた、学習機会が増大したということがありました。テクノロジーを駆使した新しい体験をすることもできたし、ざわざわした大教室にいるのとは違って、一人一人が画面と自分の内面に向き合いながら内省的な学習環境を獲得できたと思います。そうして得たものはとても大きかったと思います。

実際、前期の途中、あるいは終わりのほうで、遠隔授業に関する授業アンケートを各大学でとられたと思いますが、評価が割合高かったので、先生方はとても安心されたということはありました。

ただ、今年、遠隔授業を学生さんたちが高く評価した一つの要因は、教員も職員もみんなとても頑張って、エネルギーをそこに格別に投入したことだと思います。しかし、これが２年目３年目になったときに、遠隔でこのようなプラスの部分を学生さんたちが評価してくれるかというと、それはちょっと割り引いて考える必要があるだろうと思います。

それからそういった授業評価、何ポイントという数値にはあらわれてきませんが、確実に失ったものがあります。その一つは、これもよく言われることですが、対面のコミュニケーションにおける非言語的要素です。バストアップしか見えない、全身はフレームアウトして見えない、先生によってはちょっといらいらしてくると貧乏揺すりをしていたり、うろうろ歩き回りながら熱弁を奮ったり、熱気というのでしょうか、そういったものも画面の枠の中からはなかなか伝わってきづらいということがあります。

そしてZoomなどでライブ授業をやれば向かい合えるとはいっても、ビデオシステムを介した対面では視線は微妙にずれていて、合っていません。画面を見ているとカメラを見ていないわけですから、微妙にずれたところで対面しているわけです。したがって、一人一人の学生さんにとっては、先生が自分を見てくれた、自分に向かってこのメッセージを発してくれたという体験はできない状況になっているということです。

それから雑談、ちょっとした逸脱、息抜き、ついでの学び、終了後の余韻、こういったものもなくなってしまいました。Zoomのウェビナーとかミーティングなどはとて

も便利だと思いますが、残念ながら、「終了です」と言ったら瞬時にぷちっと切れてしまいます。ワンクリックでぱっと別の世界にワープしてしまうわけですね。「バイバイ。またね。あしたね」と見送る余韻の中で得ていたものがなくなったときに、どんな取り残され感が私たちにやってくるかということもある種体験したのではないかと思っています。

そして人、モノ、知との偶然の出会い、先ほどもありましたが異文化との交差、そういったものも画面ではなかなか起こりません。参考のために挙げておきましたが、東京大学共生のための国際哲学研究センターが、４月26日という早い時期に、オンラインワークショップ「遠隔教室」を開催しました。私はそれに参加して、とても刺激的でおもしろかったです。その中で、このスライドで挙げたようなことをもう既に早い段階で議論されていました。

そういう目に見えないけれども大事なものを失った中で、喪失体験後に私たちは一般的にどのような心の反応を得るのか**【資料①-7】**。これも臨床心理学の専門の方はよくご存じですが、大体共通のプロセスをたどることがわかっています。

まずは否認（①）から入ります。コロナなんて大したことない、自分は大丈夫だと、春休みごろは学生さんたちも大体そんな感じでした。

その次（②）、緊急事態宣言が発令され、自宅にいなさいと言われて、実害が及んでくると、腹が立つしイライラするし、なぜ自分がこんな目に遭わないといけないのか、悪いのはマスクをしないで歩いているあいつだみたいな怒りを誰かにぶつけるようなことが起きてきます。

それが過ぎると、今度は取引（③）の時期が来ます。前期は遠隔授業に決まってしまって、もうしようがない。せっかく時間ができたので、自分はその間にこの資格を取るための勉強を頑張ろうと、そういう学生さんも結構おられました。そうすればきっとうまくいくはずだ、その後いいことがあるはずだと思って、前期の間はとても頑張って課題に取り組み、さらにそういった勉強もしていた学生さんたちが一定数おられます。

ただ、それもそんなに長くは続けられないということで、夏休みが過ぎ、後期が始まって、自分の行っている大学のこの学部はまたずっと遠隔だといったことが見えてきたときに、今度は、もう疲れた、何をしても仕方がないという抑うつ感とか無力感（④）にとらわれる時期が来ます。ここが比較的短い時間で過ぎていく方もいれば、ここに落ち込んでしまって、自力ではどうしてももう戻れない状況まで深刻化する学生さんもいらっしゃいます。これが数カ月なのか数年かかるのか、阪神・淡路大震災のときには、

学生さんがそのときは何とか乗り切ったけれども、10年後にうつ状態になって、そこからようやくもう一回立ち直ることができたというお話を聞いたこともありますので、これは何とも言えません。

多くの学生さんにとって、春休み中は大体否認（①）の状態が多く、緊急事態宣言の発令中あたりに②に移行して、前期、後期を経て、今は大体④のリスクが高まりつつある時期だろうと思っています。

これも先ほど申し上げましたが、８月以降ぐらいになって、本学の学生相談室の利用件数は例年よりふえてきています。特に10月に入ってから、１年生と４年生以上、すなわち新入生と卒業期の学生さんたちの相談が多いという状況が現実に見えてきています。

2．新入生の置かれている状況

今日は新入生の置かれている状況について焦点を当ててということでしたので、今度はそのお話もしてみたいと思います。

学生生活サイクルという言葉が学生相談の中にはあります**【資料①-8】**。ライフサイクルという言葉もありますが、学生生活の中でも入学期、中間期、卒業期によって課題も違うし、心理的な体験も違うということが知られています。その時期によって、喪失に対する自覚と反応が異なるということにも注目しておきたいと思います。

２回生ぐらいの方は、まだ何とか傷が浅くて済んでいるのかなという気がしています。コロナ禍以前、去年の記憶があります。そこで築いた人的ネットワークもあるので、各自がそこでつながり、キャンパスには来られなくても何とか喪失を補いつつ頑張れているという方もいらっしゃると思います。しかし、３回生後半から卒業期、社会に出ていく前段階にある学生さんたち、先が見通せない社会にどうやって出ていったらいいのか。もともと巣立ちや自立への不安の高かった学生さんたちは、複合的なストレスが加わってシリアスな状態になりやすいということが起きていると思います。

新入生について言うと、今年の新入生は入学式もなく、本学では結局後期が始まる直前に新入生歓迎会という名前で新入生全員に来ていただいて、儀式としては何とかやりましたが、春はありませんでした。そしてガイダンス、課外活動、学科の新入生歓迎行事、そういった参加も一切できなかった。学内探索やアルバイトの試みなどを通して先輩や仲間と交流して、徐々に修学や学生生活に適応していくというプロセスを踏めてい

ないまま今に至っています。彼らには何らかの方法でその支援が必要だということです。これは対面授業の再開だけでは絶対に補えない部分です。これについてどうしていくかを真剣に考える必要があります。

新入生はそもそも比較の対象がありませんので、自分が何を失っているかがわかっていない**【資料①-9】**。デフォルトが、全面遠隔授業とStay Homeでした。本学でも前期末にいろいろなアンケートをとっていますが、その中の記述を見ると、新入生さんの記載は上回生とはやはりちょっと違っていて、友達ができない、つらい、寂しい、不安という漠然とした実感にとどまっています。そういった反応が特徴的だと思います。学生さんたちは、遠方の方はご実家に戻られた方が多かったんですが、その場合でも、ご家庭で家族のサポートが得られなかった場合は、この問題がかなり深刻化していると思います。

それからオンラインでいろいろ質問できる仕組みがつくられ、そこで質問しやすかったという反応も確かにありましたが、一方で、そもそも何をどう聞いたらいいかがわからないというレベルで困ってしまった学生さんにとっては、なかなか使いづらかったと思います。そして未解決の問題や不全感をずっと持ち越していて、もうどうしていいかわからないと諦めてしまっている場合も少なくありません。

今年前期は休退学の率はむしろ例年より少ないのではないかといったデータもあるようですが、多分後期、これから10月11月に、前期に決断し切れなかった、でももう諦めてしまった学生さんたちが顕在化してくるのではないかと思います。

そしてこれも大勢の１年生の方が感想を書かれていたことですが、入学以来、同級生と場をともにする機会がほとんどなく、結局、自分の属するコミュニティ、すなわちキャンパスや学部や学科内の自分の立ち位置がわからないままであるということもあります。同じ授業を受講していても、自分がどれぐらいほかの人と同じぐらいやれているのか、落ちこぼれているのか進んでいるのか、そういったことすら全くつかみようがないということで、もうとにかく不安で不安で仕方がない、そういったことを書かれている学生さんがたくさんいました。

前期末以降、学生相談室での対応状況も少し一般化して、こんな相談が目立ったということで挙げてみました**【資料①-10】**。

新入生の場合は、今どきですので、親御さんからの相談のほうがまず多かったです。とても印象的だったのは、お母様が学生相談室に相談に来られて、窓口で私の顔をぱっと見るなり、「あ、高石先生」と言われました。どういうことかというと、恐らく、前

期の遠隔授業をご本人と一緒にお母さんが受講していたのではないかと思いました。そういった新入生さんで困っている学生さんの親御さんが横につきっきりでとか、あるいはもうかわって受講して課題に取り組んでいた方もそんなにまれではなかったのではないかとひそかに思っています。

新入生の保護者の方からは、横で見ていて、本当に課題が多そうでもう見ていられないと。子供がつらそうで、「もう死にたい」と泣き出したのですが、どうしてあげたらいいですかと、泣きながらお電話をされてきたお父様お母様もいらっしゃいました。

それからこれももう全部は読み上げませんが、後期に入ると、新入生ご本人からも電話や対面での相談がだんだんふえてきています。前期は親元にいた場合が多かったのですが、一人暮らしになって、本当に何から始めていいのかわからないと。つまずいている学生さんは、前期の学修簿、成績簿をもらったんですが、「不」「不」「不」と書いてある。この「不」が幾つあったら留年するのか、といった質問をしてこられる。それは「不可」ということだよねといったお話をするところから始めたり、あと、必修って何ですかとか、GPAって何ですかとか、本当にわかっていないことがたくさんおありです。後期の履修登録をどうすればいいのかわからないとか、長く家にいたので、対面授業に出てくるのが怖い、人とどう接したらいいかわからない。そういった自立への不安、分離不安みたいな症状を呈している新入生の方たちもそんなに珍しくはありません。

もっと大変だなと思ったのは、４月５月あたり、遠隔授業が始まって間もないころ、学生さんがまず高校段階でWordなどを使ったことがないということです。今はもうメモをとるのも全部スマホで、キーボードを打つことにすらなれておられないので、理系の学生さんで、計算式を書いて課題をウェブで出せと言われたけれど、Ｘの２乗のこの小さい２ってどうやって打てばいいんですかみたいなところから、先生方も本当に大変だったと思います。そういったご指導から遠隔でされながら、教員も学生も何とか前期は必死で頑張ったけれどももう疲れ果ててしまったというのが今の状況だろうと思います。

３．今後求められる学生支援

今後求められていく学生支援ですが、文科省がそういった世論とか学生さんの声などを受けとめて、９月半ば、後期授業開始前に、とにかく対面をきちんとやってください

という周知を出しました**【資料①-11】**。このときに宣言されたのが、大学等における教育はオンライン等を通じた遠隔授業の実施のみで全てが完結するものではなく、豊かな人間性を涵養する上で、直接の対面による学生同士や学生と教職員の間の人的な交流等も重要な要素であるということです。つまり、正課授業の実施だけ、しかも遠隔だけで大学教育は完結しないということを、改めて言ってくださったということに意味があるのかなと思っています。こういった支援をしていくに当たっては、ますます全学的な連携や協働が求められていると思います。

高等教育が今後どのように進んでいくかというのは、本当に未知の世界です**【資料①-12】**。誰にも確かなことはわからない。いつごろどのようになるかがわからない。もとに戻らないことは多分確かであろうとは思いますが、そういった中でみんなが手探りで、学生、保護者、教職員、専門家がともに寄り添いながら、連携しながら、次々に新たに起きてくる事象に対応していく必要があると思います。

これから重点的に必要な学生支援ということで私が思うものを、３点挙げておきました。その中で一番至急に手当てをしなければいけないことが、新入生に学生生活（キャンパスライフ）を提供することだろうと思います。今年の新入生さんはこれを喪失した状態のままいらっしゃいます。さらに、自分が失った、そういう被災をしているということへの自覚すらない状況で苦しんでいるのです。

二つ目は、年度にかかわらずですが、孤立化してしまっている学生さんにもっと支援の手をこちらから届かせなくてはならないということ。三つ目は、未来に向けて、With コロナ、Post コロナの社会がどうなっていって、そこに巣立つためにはどういった力を身につけていくべきなのか、そこの支援も必要になってくると思います。

こういった発想の中で、学生相談室でもいろいろな試みを今やっているところです。一つは、今まで対面ができていたときにはやっていた居場所支援を後期は復活させました。そして対面のグループ活動も再開しています。このような形で、学生相談室の中にフリースペースがあり、あるいは先ほどの建物のもっと広い教室を確保して、とにかくディスタンスと感染症の防止対策はとりながら来ていただいて、どうすればできるだけ今までと近い形で学生さんの授業以外のところでの少人数あるいは個別の教育的支援ができるかというところで始めています。結構常連さんも既に来ています。

あと、今日視聴してくださっている教職員やカウンセラーの方々にお伝えしたいなと思っているのが、全学横断的な学生支援の仕組みづくりをとにかく頑張っていきたいということです**【資料①-13】**。一般の教職員の方々には、①の「学内の専門機関（学生

相談室など)」がないところはほとんどないと思うので、ぜひもっともっと活用していただきたいということです。

本学でも新入生の学内ツアーがありますが、そういうところに盛り込んでいただいたり、後期に入門授業が対面で再開しているところでは、学科ごとに少人数で区切って、学生相談室に連れてきていただいて、ガイダンスをしたりグループワークを行ったりというコミュニケーション支援、仲間をつくろうみたいなところからお手伝いをしています。

②として、欠席過多、それから低単位取得の学生さんたちの情報はカウンセラーにはなかなか直接把握できない部分ですが、要支援であることの最も客観的で有力な手がかりになるので、これを放置せずに、そういう情報があれば、ぜひ専門の部局、全学的な支援の仕組みのところに共有していただいて、一緒に対策を考えていただきたい。遠隔授業のために前期に抱えながら潜在的に終わってしまった問題が、今年度は後期の10月11月あたりにどっと顕在化してくるだろうと予測していますし、現実になりつつあるので、待ったなしだと思います。

③は、今日は時間がないのでお話しできませんが、コロナ禍で不安が高まると、大人もそうですが、学生も同様で、多様性への不寛容が起きてきます。こういうときに、障害や疾病を抱えた学生さんも含めて、マイノリティの学生さんへの目配り、支援のまなざしをより一層丁寧にしていかなければならないのではないか。そういった体制強化をしていただきたいと思っています。

4. まとめ

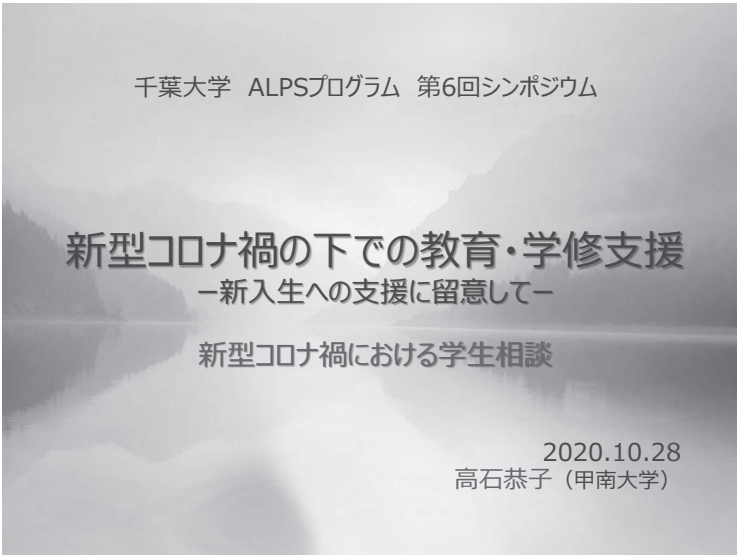
まとめにかえてです。コロナ禍は、大学とは何かを改めて私たちに問いかけてくれていると思います。『現代思想』の中で、大橋先生という表現文化論の専門の先生がこのような表現をされていて、おもしろいなと思いました**【資料①-14】**。パンデミック以降に多くの大学が直面した状況は、大学における身体の消失として考えることができるということです。これは、実際に対面ができなくて、学生さんたちの体がキャンパスから消えていたということだけではなく、居場所を使ったりいろいろ語り合ったり、体を通して行っていた活動が消失しているということです。

あと、「キャンパスライフ」は、知を創造し、個々人を全人的に成長させてくれる大学の本質を構成する要素ではないか。これを私は強く言いたいと思います。

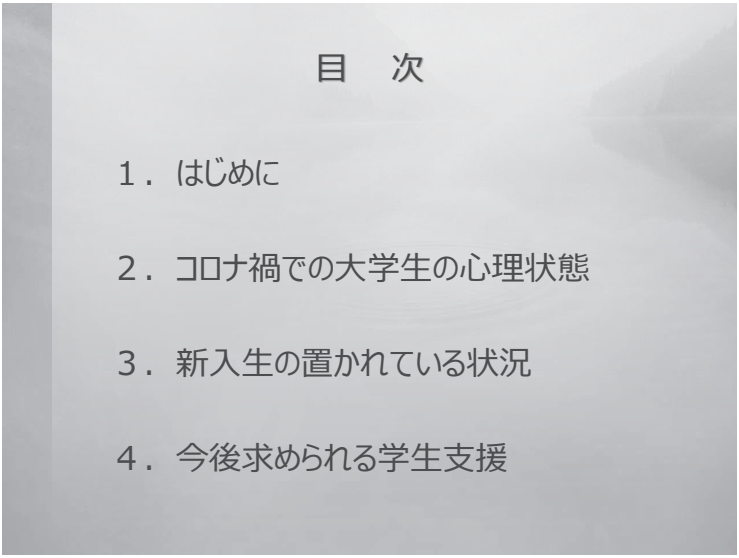
コロナ禍で入学した今年の新入生は、今はマスクやアクリル板を介してで、仕切りはまだありますが、ようやくキャンパスのにおい、音、学食の味、人と一緒にいるぬくもりを体験しつつあるところです。彼らが喪失している傷つきを意識化しつつ、受け入れつつ、一緒に乗り越えていくプロセス、長いプロセスになると思いますが、それをともに歩む覚悟が今私たちに求められていると思っています。ちょっとだけ長くなってしまいましたが、私のお話ししたいことは以上です。ご清聴ありがとうございました。

資料

〔資料①-1〕


千葉大学　ALPSプログラム　第6回シンポジウム
新型コロナ禍の下での教育・学修支援
－新入生への支援に留意して－
新型コロナ禍における学生相談
2020.10.28
高石恭子（甲南大学）

〔資料①-2〕


目　次
1．はじめに
2．コロナ禍での大学生の心理状態
3．新入生の置かれている状況
4．今後求められる学生支援

〔資料①-3〕

1．はじめに

➢ 甲南大学の新型コロナウイルス感染症対策の経過

2月19日　学園に新型感染症対策本部設置
3月　1日　西宮キャンパス入構禁止（4日間）
3月11日　入学式・ガイダンス中止決定
3月16日　新学期授業対策会議設置
3月23日　前期Web活用授業開始4月20日（2週間延期）決定
4月30日　学修環境整備等支援費（5万円）支給発表
5月21日　段階的に対面授業実施を告知　5/25緊急事態宣言解除
6月　8日　一部対面授業再開
7月　1日　限定的に一部課外活動（体育会）再開
　8月4日～9月24日　夏期休業　　9月23日・24日　新入生歓迎会実施
9月25日　後期開始・原則対面授業　対面率76.1%（10.7時点）

＊学生相談室は4月20日よりハイブリッド体制開始（対面・電話・ビデオ通話）

〔資料①-4〕

2．コロナ禍での大学生の心理状態

➢臨床心理学からみたコロナ禍

今回のコロナ禍は、大震災などと匹敵する自然災害として、私たちの心と生活に、長期的な影響を与えると考えられる。

➢コロナ禍における喪失とトラウマ

ただし、震災と異なるのは、瞬時に大勢の人が生命を失ったり生活を奪われたりしたわけではなく、じわじわと、あるいは断続的に、個々人によって異なる形で深く傷つき何かを失っているという、見えにくさと共通理解のしにくさがあること。

〔資料①-5〕

➢ コロナ禍が学生に及ぼす心理的影響

学生はこのコロナ禍の中で様々な体験をしている。

たとえば・・・内定取り消し、留学の中止、部活動や試合の中止や延期、アルバイト中断による経済的逼迫、友人との隔絶、施設や病院にいる祖父母との面会禁止、志望企業の採用停止、親の失職、感染またはその疑いによる差別や中傷、家庭内暴力、身近な人の感染死など

・深刻なトラウマを負った学生にとって、それらを乗り越えるためには長い年月と他者の支えが必要。

・特別なトラウマ体験がなくても、すべての学生は「本来あるはずだったキャンパスライフの喪失」という体験の渦中にあることを、教職員はしっかり受け止めておく必要がある。

〔資料①-6〕

➢ 遠隔授業によって学生が失った実は大切なもの
・・・雑談、余韻、ついで、偶然の遭遇、交差

• 遠隔授業で学生が得たもの

・地理的制約からの解放（遠距離通学者の学習時間の確保）
・心身の制約からの解放（障害や病気で通学できない学生の学習機会の増大）
・テクノロジーを駆使した新奇な体験
・内省的学習環境

• 授業評価には表れないが失ったもの

・対面コミュニケーションの非言語的要素（全身はフレームアウトして見えない）
・視線の一致（ビデオシステムを介した対面で視線は合わない）
・雑談やちょっとした逸脱、息抜き、ついでの学び、終了後の余韻
・人、モノ、知、との偶然の出会い、異文化との交差

東京大学共生のための国際哲学研究センター　オンラインワークショップ「遠隔教室」
2020.4.26　https://youtu.be/ooN8nYvZhec

〔資料①-7〕

➢ 喪失体験後の心の反応の経過

①否認　コロナなんてたいしたことない、自分は大丈夫

↓

②怒り・イライラ　なぜ自分がこんな目に？　悪いのは○○だ！

↓

③取引　今は自分は△△を頑張ろう、そうすればきっとうまくいくはず

↓

④抑うつ・無力感　もう疲れた、何をしても仕方がない

↓

⑤受容とアイデンティティの再構築　もうコロナ以前の自分や生活には戻れない。新しい生き方を探そう

多くの学生にとって、春休み中①→緊急事態宣言発令中②→前期の活動制限継続中③→夏休みを経て後期が始まった今は④のリスクが高まりつつある。

8月以降、学生相談室の利用件数は例年より増加（特に1年生・4年生）

〔資料①-8〕

3．新入生の置かれている状況

➢学生生活サイクル（入学期・中間期・卒業期）によって喪失に対する自覚と反応は異なる

（2回生以上は「コロナ禍以前」との比較において喪失を自覚し、それまでに築いた人的ネットワークで補填を試みることが可能。また、3回生後半～卒業期の学生は、先が見通せない社会への巣立ちの不安が加わり、喪失への反応の深刻度が高い。）

【新入生特有の事情】

・今年の新入生は、入学式、ガイダンス、課外活動や学科の新歓への参加、学内探索、アルバイトの試みなどを通して先輩や仲間と交流し、徐々に修学・学生生活に適応していくプロセスを踏めておらず、何らかの方法でその支援が必要。（対面授業再開だけでは補えない）

〔資料①-9〕

・新入生はそもそも、自分が「何を失っているか」がわかっていない（デフォルトが全面遠隔授業＋StayHome）。

→「友達ができない」「つらい」「不安」という、漠然とした実感にとどまり、孤立感を深めやすい。家族のサポートが得られない場合はより深刻化する。

・オンラインで教員や事務窓口に「質問できる」しくみはあっても、何をどう訊いたらよいのかがわからないことが多く、未解決の問題や不全感が蓄積している。諦めてしまっている場合も少なくない。

・入学以来、同級生と場を共にする機会がほとんどなく、自分の属するコミュニティ（キャンパス・学部・学科）内での位置（例えば学習の進度、活動の範囲など）がつかめずに不安が募っている。

〔資料①-10〕

➢ 前期末以後の学生相談室での対応状況

- 特徴的な相談例（そのままではなく一般化しています）

【新入生の保護者から】

課題が多くつらそうで見ていられない。死にたいと泣き出したがどうしたらよいか／前期、全く遠隔授業についていけていなかったことに気づいたがどうしたらいいか／子どもはあんなに頑張っていたのに不可だった。成績評価に納得できず、担当教員や教務に問い合わせたが親身な返答がなかったのはなぜか。

【新入生本人から】

前期は遠方の実家にいた。対面授業再開で一人暮らしを始めたが、友人がおらず、何から始めたらよいかわからない／成績の見方がわからない／前期、「不」とついたのがいくつかあるが、留年するのか／必修とは何か、GPAとは／後期の履修登録がこれでよいのかわからない／対面授業に出るのが恐い。

〔資料①-11〕

4．今後求められる学生支援

「大学等における本年度後期等の授業の実施と新型コロナウイルス感染症の感染防止対策について（周知）」

文部科学省　令和2年9月15日

https://www.mext.go.jp/content/20200916-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf

「この際、大学等における教育は、オンライン等を通じた遠隔授業の実施のみで全てが完結するものではなく、豊かな人間性を涵養する上で、直接の対面による学生同士や学生と教職員の間の人的な交流等も重要な要素である・・・」

「新入生をはじめとする学生生活に悩みや不安を抱えた学生の把握に努め、カウンセラーや医師等の専門家とも連携してきめ細かくご対応いただくよう・・・」

〔資料①-12〕

➢ 支援においてますます求められる連携力・協働力

- 高等教育が今後どのように進んでいくかは未知の世界
  →学生（保護者）・教職員と専門家が共に寄り添い、連携しながら、新たな事象に対応していく必要がある。
- これから重点的に必要な学生支援
  ①新入生に「学生生活」（キャンパスライフ）を提供すること
  文部科学省は、豊かな人間性の涵養＝全人的成長の促進も、高等教育の重要な要素であると明言している。失われたものをどれだけ回復できるか。

  ②孤立化する学生（とくに過年度生、一人暮らし等）に支援の手を届かせること

  ③Withコロナ、Postコロナの新しい社会へ巣立つ道筋を示し、そのための教育・支援を行うこと

〔資料①-13〕

➢ 全学横断的な学生支援のしくみ作りを

①学内の専門機関（学生相談室など）を活用する。

・新入生の学内ツアーに学生相談室を盛り込む。

・入門授業等の時間を使ってカウンセラーがコロナ禍での心の健康管理に関するガイダンスやコミュニケーションに関するグループワークを行う。

②欠席過多・低単位取得の学生は、要支援の最も有力な手がかりであり、放置しない。遠隔授業のため前期に抱えていた潜在的な問題が、今年度は後期に顕在化する。

・学科等での個別学修指導面談、教育懇談会での保護者面談などの際に、学生相談室の利用を案内する。

・理由の明確でない休退学の申し出の際は、受理する前に一度カウンセラーの面談を受けることを勧める。

③コロナ禍は、不安から「多様性への不寛容」をもたらす。マイノリティの学生への確かな支援のまなざしをもち、体制を強化する。

〔資料①-14〕

➢ まとめにかえて

• コロナ禍は、大学とは何かを改めて私たちに問いかけている。

「パンデミック以降に多くの大学が直面したこうした状況を、大学における『身体』の消失として考えることができる」

大橋完太郎　大学の「身体」は変容する　（「現代思想」2020年10月号　特集　コロナ時代の大学　93-101）

• 「キャンパス・ライフ」（コミュニティの一員として、身体を通して活動すること）は、「知」を創造し、個々人を全人的に成長させてくれる、大学の本質を構成する要素ではないか。

• コロナ禍で入学した今年の新入生は、マスクやアクリル板を介してではあるが、ようやくキャンパスのにおいや、音や、学食の味や、人と共にいるぬくもりを体験しつつある。

• 喪失の傷つきを意識化し、受け入れ、乗り越えていく長いプロセスを共に歩む覚悟が私たちに求められている。

［講演２］

COVID-19であらわになった日本の大学教育

東京工業大学教育革新センター副センター長・教授
田中　岳氏

はじめに

ご紹介にあずかりました、東京工業大学の田中と申します。今日は、皆さん、よろしくお願いいたします。

今日は「COVID-19であらわになった日本の大学教育」というタイトルで、あら探しをするという観点ではなく、課題を提示できればなと思っています。冒頭では初年次の支援という説明でしたから、多分、皆さんもそこに関心が強かろうと思います。ですが、実際は総合的で全般的な話になると思います。初年次に絞って話をすること自体も難しいですし、問題がそこまで限定的にわかり得るのかというなかなか難しい問題がありますので。

お話をいただいたときに、私としては、東工大が前期をどういうふうに乗り切ったか、そういう中で私自身が何を感じて、初年次学生に対してこういうことがあるのではないかとか、日本の大学教育についてこういうことがあるのではないかということだったらお話しできるということでお引き受けしました。したがって、ひょっとすると、どんぴしゃ初年次のことだけ聞きたいという方はちょっと肩透かしを食らうかなと心配しているんですが、そこは高石先生を含めて、後ほどの議論の中でフォローできればなと思います。

私が勤めているのは教育革新センター、いわゆる大学教育センターというものだとご理解ください。いろいろなものをやっています。ホームページもごらんいただければと思います**【資料②-2】**。

冒頭にもありましたが、今ホットなものというとこの記事**【資料②-3】**になろうかと思います。実際これを読むと、少し「えっ」という感想を抱くところがあります。皆

さんご存じかもしれませんが、大学教員２万人のFacebook Groupというのがあって、そういったところでも随分取り上げられて、文科省は何を考えているんだといった議論が多くなされています。今、こういう形で対面圧力みたいなものがあるのも必定だったと思います。

読売新聞が世論調査をされたそうですが、読売のオンラインでも、対面授業を再開すべきと思う人は70％に上がったということで、社会からの要求もこういうあたりなのかなというのはあります**【資料②-4】**。

とはいえ、対面授業を再開すればキャンパスライフが回復するかというと、それは別問題ではないかと思います**【資料②-5】**。キャンパスライフそのものの回復は対面授業の再開とは似て非なるものではないかというのが私の理解です。

また、日本はかなり広いので、地域差があると思います。先ほどの共同通信**【資料②-3】**に対面授業の再開比率がこんな感じだというのがありましたが、その数日後に文科省が、北海道とか東北といった地域ごとの対面授業の再開比率をひっそり発表しました。それによれば、東京は１割ぐらい、あとは３割とか、本当にもうばらばらの状態でした。私はある大学の外部評価をやっていますが、Zoomの打合せでお聞きしていると、６月ぐらいには入構制限を解除していろいろやり始めましたということでした。しかし、東京では本当にオンラインでやらなければいけないんですよといった感じが続いていて、全然違う雰囲気です。全体状況をつかみ取るのは、なかなか難しいと思うところです。

大学人同士で同じ業界の状況が見えていないわけですが、大学の状況も社会の皆さんにはなかなか伝わっていなくて、大学側がちゃんとやっているんですと言うだけではちょっと分が悪いかなというのが、今のところの私の印象です。いろいろ言いましたが、要は、キャンパスの価値とは一体何だろうかというのが私の最近の関心事ということです。

今日は、前半は東工大のこと、コロナのことについて少しお話しします**【資料②-6】**。実際、経緯については、いろいろなところで書かれている方がいらっしゃいます。千葉大学の方ですと、私の友人の白川優治先生が『現代思想』（2020年10月号）にコロナ禍における前期の雰囲気を史実として詳細に書き起こしてくださっていて、とても勉強させていただきました。そういうものを参考にしていただいたらいいのかなと思っています。

ですので、私としては生々しいところ、先ほど紹介した教育革新センターにいなが

ら、現場の人間がどういうふうにああいった大学教育を進めていったのか、最後にそういうものを経てみて、あるいは途中でも挟むかもしれませんが、課題としてこういうことを今持っているというあたりをお話しすることで私の持ち時間を埋めていきたいと思います。

1．実は既にコロナ禍だった

これは１月24日の武漢の光景です**【資料②-7】**。私はこれを１月28日のYahoo!ニュースで見ました。そのときは、ああ、町がこんなふうになるのかと、まだちょっと人ごとだった感じがあります。

コロナ禍というと、４月あたりにみんながオンラインでわーっと騒いだあたりから、コロナ禍って災いだねという雰囲気でしたが、振り返ってみれば、気づくか気づかないかは別にして、１月ぐらいから実は既にコロナ禍だったわけです。

あの波がどういうふうに伝播していくかというと、ここにあるとおり、コロナウイルスによる影響は２月末か３月頭ぐらいに中国から韓国に移り、アメリカの西海岸に移りました**【資料②-8】**。日本はちょうど大学の後期が終わるか入試かというあたりでしたから、授業のこういったところはあまり考えずにすんだかもしれません。しかし、この状況を冷静に見ると、日本も春になればコロナウイルスによる影響が授業実施上の課題に入ってくるのではないかということが予測されます。

PODというのはアメリカのFDをやっている人たちの団体で、そのメーリングリストですが、私が一番びっくりしたのは、２月27日に、「remote teaching」という言葉が件名に出たことです。あ、そういう言葉があるのかと思いました。

【資料②-9】の太字のところを見ていただくとわかりますが、アメリカのCDCの方が、COVID-19が広がると、学生たちが学校という場所や建物へ授業を受けに行くこととは何か違う要求が発生するのではないか、そこでInternet-based learningを考えなければいけないのではないかと言いました。そこで大学の人がこれを引用して、ファカルティーに対して何かアドバイスをしますかということを投稿したわけです。

これは珍しく60か70ぐらいのオーダーで返信がつながりました。PODのメーリングリストはふだん多くても20ぐらいですし、それも年に１回ぐらいです。だから日本時間２月27日時点でアメリカでのこの盛り上がりを見たときに、私は、あ、これは日本に来るなと思いました。本来であれば日本から向こうに行く流れであるわけですが、

日本では幸いに授業が収束していた時期でしたので、この波をちょっと違う感じで考えていた方々も多かったと思います。あるいは、こういうメーリングリストに登録している日本人は案外マニアックかもしれませんから、ここから４月のオンライン授業を想定するのはなかなか難しかったのかもしれません。

思い出していただくと、国立大学の前期日程がちょうど終わって、あれを見計らっていただいたのかどうかわかりませんが、こういった状況がありました**【資料②-10】**。日本教育工学会が週末にオンライン学会をやったのですが、うちの若手が研究室でオンライン学会に参加していたのを私は見ていました。先ほどのメーリングリストのメールの件もあり、最悪の場合でもこれで授業ができるなと直感したので、うちのセンターではこういったオンライン教育、Zoomを使った遠隔授業の可能性について議論をスタートさせました。２月末ぎりぎりのことでした。あの当時は、どちらかというと、授業を延期するのか、暦どおり開始するかみたいな感じが大勢で、４月には収束するのではないかという中、二択で考える雰囲気がとても強かった記憶があります。第三の選択肢としてオンラインの遠隔授業を考えようとしていました。

３月13日に、うちのセンターの会議体で、３月末までにはこれをやらなければいけないとか、授業は４月６日スタートということで、ここでZoomの授業を始めるためには何をしなければいけないか、ここから授業中盤に進んで、学生相談とかがやはり起きるのではないか、最後に第１クォーターの終わり、６月の頭ぐらいで試験をどうするんだみたいな話をしていました。わずか３～４人ぐらいでしたが、センターで議論したのを今でも覚えています。

教育革新センターでは東工大のMOOC（ムーク）などをつくっているので、オンデマンドの実績はあります。皆さんはMOOCをごらんになったことがあるかもしれませんが、本当に贅沢につくり込んだ映画のようなものだと思っていただいたらいいです。そのようなオンデマンドのよさはありますが、今から３月頭で各教員に同じようなものを準備していただくのはどうだろうという話になりました。負担という言葉が適切かどうかわかりませんが、授業の準備、それからオンデマンドになると学生が夜中に見始めるのではないかといった懸念がありました。学生はやはりコマという枠の中で授業を受けて学習習慣が身についていきます。授業の中身だけを届けるのではなく、授業を行っていくことで学習する習慣がついていくはずなので、やはりライブ配信ではないかという話をして、ライブ型のオンライン授業を提起しようとしたわけです。

実際、動きの早い大学は、国際的な動向が強く、１月２月あたりからそのつてでいろ

いろな情報が入ってきて、これはやばいということがわかって移行していった大学が多かったと思います**【資料②-11】**。そして３月24日に、文科省から「令和２年度における大学等の授業の開始等について」という通知が出ました。そこで東工大は、同日、新入生についてZoomで授業をおこなうという通知を出しました。環境を整えてほしいというメッセージを投げたわけです。

2. コロナ禍の真っただ中へ

そしていよいよコロナ禍の真っただ中に入ります**【資料②-13】**。オンライン授業の実施に向けた課題は様々ありますが、例えば先生方がZoomをきちんとやれるかどうかといった点があります。その点では、東工大は本当によかったと思います。先生方が研究室でZoomの契約をされて、海外の研究室とZoomでやりとりをしたりしているというのは聞いていたので、そこの部分についてはあまり心配ないと思いました。また理系の先生方はふだんからPower Pointなどを使った授業をやられています。ただ、全学で導入するときの技術的課題があるのではないかと思いました。それから、本学にはいませんが、例えば耳の聞こえない人、目の見えない人には、オンライン授業がどうなるのかといった問題もあります。Zoomには字幕機能があるんだけどといった話もしたり、センターのみんなでいろいろと検討をおこないました。

いわゆるFDというのは、CITLセミナーで３月末に１回、午前と夕方に１日２回やったのみです。そして、学科ごとにZoom Faculty Leadersを置いていただいて、そこに学科の先生方の質問が届くようにして共有解決し、センターからの情報も流れるような組織体をつくりました。そこのメーリングリストで、こんなことができないけど誰か知っているかといった問い合わせが行われていました。センターでのZoom対応は私と准教授１名、特任講師１名でしたから、センターで全部背負うことはできないので、皆さんの総力を挙げて組織化をして対応しました。

センターとしてのコアな取り組みは、ウェブサイトをつくり、Zoomの遠隔授業ガイドや、Zoom Faculty Leadersで集まったものをZoom知恵袋に落として公開したりといったことです。私が執筆したものにはオンライン授業の心得といったものがあります。こういったものをやっていく中で、４月７日に緊急事態宣言が出て、５月４日に授業開始となりました。

初年次の学生についてですが、「心得に込めた思い」の最後のところをご覧ください

【資料②-14】。思えば、新入生って卒業式や入学式もなかったよねという話で、教員の皆さんは授業だけで一生懸命でしょうけれども、先生の一言で救われる学生もいますから、といったことを書きました。また、学生が、「先生、オンライン授業が何だか下手だね」と言うだろうなというのはすぐ予想できました。そこで、これを学生も読むだろうと思って、教員も学生も互いに初心者だという意味では新しい経験をする学習者でもあるので、そういった視点で頑張ろうよというメッセージを込めたというのが、私の執筆した中身です。

また、ICT化について、これは後で読んでいただければ結構ですが、ICT化イコール機械だけではない、という趣旨の文章です**【資料②-15】**。

次のスライドは、４月から７月にかけて、東工大はこのように動いたということを示しています**【資料②-16】**。後でちょっとお見せしますが、HyFlex Modelの検討も実効再生産数が落ちましたから５月ぐらいにおこないました。あとは６月に現況調査を実施しました。今、学生たちがどういう状態で授業を受けているかということで、学内では現況調査をやりました。その調査結果を受けて、第２クォーター以降に、この七つの項目（①課題の量②授業後のストリーミング視聴③授業中の休憩時間④通信環境への配慮⑤ビデオON／OFF⑥成績評価⑦授業後の質問機会）を教員にフィードバックしました。音の聞きづらさやビデオのオン／オフについては、学生からかなりの意見がありました。

HyFlex Modelについては、後でちょっと見ていただいたらわかると思います**【資料②-17】**。これは学内のメモでつくったものですが、ちょっと実施が難しいなという話になりました。例えばこれです**【資料②-18】**。これは８月にコーネル大学がつくったHyFlexのYouTubeですが、スクリーンにZoomの学生たちが映っています。ここで見ていただくとわかりますが、学生たちがライブで教室にいて、Zoomによる参加者がいて、教員がいて、という形になっています。こういう形をどうつくるかを検討し、もし実施できるとしても第２クォーターですぐにはとても無理だという結論になりました。このビデオが出たのは８月ですが、HyFlex Model自体は５月ぐらいからいろいろインターネットで騒がれていたので、それを見つけて話をしました。

８月に第２クォーターが終わって、こういった経験調査も行いました**【資料②-19】**。学生には、オンライン授業を受けてどうだったか、そしてその子たちが持っている学習観を、教員には、オンライン授業及びその授業観を、それらがうまく合うような形でアンケートを実施しました。

仲間の大学ではということで**【資料②-21】**、この間、それこそZoomで一月に１回とか２回の頻度で、全国の大学の職員や教員の仲間と情報交換し、そこから大学ごとの様々な状況が見えてきました。

3．経験を経て：大学教育への私見

そういった経験を経て何を得たかということですが、**【資料②-23】**の下から四つ目の「１年生の学びほぐし」のあたりにアンダーラインを引かせていただきました。アクティブラーニングのときの事例によく出されますが、学生は新しい情報をシャワーのように浴びる講義スタイルがすごく好きで、先生方もそういうことをやるのが授業だと思っていたりします。そういう意味では、それがお互いにハッピーです。しかしそれで本当にいいのかということです。オンライン授業もうまくいっているように見えて、問題が隠れてしまうわけです。いわゆるunlearnとか学びほぐしといいますが、今でこそ高校でいろいろ探求学習などをやっていますが、１年生は大学に入ると、もっと違う意味で、キャンパスを使って、異なる学習方法を獲得していくはずなのに、今は未獲得で終わっています。

ある大学の友人とも話しましたら、今の１年生はスタディサプリで受験勉強をしていたからオンライン授業には慣れていると言うんです。スタディサプリで受験勉強をした時は大学に行こうというモチベーションが高い時です。そんなモチベーションも無くなって、大学に入ってスタディサプリ型の授業の延長で学びをしているわけです。こうした状況をどう考えるか、改善するならどういうふうにやるか。どうすればいいかというのはなかなか見つかりませんが、１年生の学びほぐしについて視点を持っておかないといけないのではないかということです。

それとセットになるかもしれませんが、下の行に、「１年生は大学学習スキル獲得がままならない中での課題レポート等作成」となっています。１年生の学習スキルは、高校から大学に入って変わります。友人も興味も変わるわけですが、学習スキルも変わって、大学に合わせた学習スキルの獲得ができていない可能性が高い。

また先ほど高石先生も言われていましたが、対面授業であれば、授業中の教室で隣の学生がああいうふうにしているから自分もこうすればいいんだということで、周りを見ながら調整できます。ですが、オンライン授業では周りに人がいなくて、自分で、これでいいのだろうかという状況に陥る。１年生はそういう状態に陥っているわけです。

「初年次学生等の移行支援」と書いてありますが、初年次学生、それから編入生もそうですし、大学院に新しく来た学生、そういった学生たちに、今までやっていたいわゆる学修支援というものをオンラインで届けられるような何かをつくらないといけないと思います。

その下の行に「開放オフィスアワー」と書いてあります。授業が始まる前、授業が始まった後、あるいは休憩時間に、教員を囲んでとか、学生たちが集まるといったことが今はなかなかできません。「開放オフィスアワー」というのは私の友人が大学でやっていることです。Zoomを１～２時間あけておいて自由に学生が入ってこられるようにしておくというものです。そういう形で１年生のスタディスキルみたいなものを大学に合わせていくとか、高校までの学びだけではない、何か新しい異なる学習方法が獲得できるようにする。今は対面で学びほぐしができませんから、何か別の手当てを打たなければいけないというのがあると思います。

一番上の行に戻っていただくと、とはいえオンライン授業は、大教室でいえば最前列に横一列で学生が座っているような状態です。そういう意味では、オンラインでのラーニングスキルがあるのであれば、普段の大教室授業よりは非常に効果が高いというのは皆さん多分わかるのではないかと思います。大教室の後ろだったら先生の声はなかなか届きませんが、Zoomの声はきれいですからよく届きます。

教材、それから学習がオンデマンドも含めて習慣化していきます。一方で、一人ぼっちの学生が持つ孤立感は増幅されるので、そこのケアが必要だということになります。オンラインが進んだことによって、ふだんは教室で元気だった子たちがふさぎ込んだり、対面授業はちょっと苦手だなという子が実はオンライン授業で復活したり、今、いろいろなパターンが生じているようです。そのあたりをうまく拾い出して、うちの大学ってどういう学生たちが多いのかということを本当に見つめ直さなければいけないと思います。

成績評価は今、混乱しています。数学のテストなども１点刻みで設定するわけですが、それができないということで、結構混乱しています。教員も学生も混乱しています。

一方対面授業はどうかというと、この前FDをやったときに、実験系の教員が、学生たちにはまず片づけから学んでほしいんだよねと言ったのがとても印象的でした**【資料②-24】**。確かに実験の動画を先生がつくって、見せるといった授業をやっています。あるいは医療系の実習だったらVRを使ってとか、いろいろと方法があります。しかし

オンライン授業だと準備や片付けといった前後が切れているので、そこに対面授業の価値みたいなものがあるのだろうと思います。

それをやるために、じゃあということで順次性を見直す。つまり実験の手はずとかそういうものは先に見せておいて、本当の実験は後でやるということを考えます。例えば、前期は、実験はやらないが、ビデオでは手順をある程度見せておき、８月後半ぐらいから実験をやったわけです。そういった順次性の見直しみたいなことはできるのではないかと思います。

また、オンライン授業による代替というよりも、対面実施が前提になっているものの代替、ここではCOILを挙げましたが、そういったものを本当に考えなければいけない時期に来ていると思います。

あとは寮です。学生寮といっても生活寮と教育寮がありますから、教育寮にも支援を行っていくことが必要です。

教務事案としていくつか申し上げますと、まず、BYODを含むインフラはやはり大事です。BYODとは、学生がPCを必携にするということです。それから、HyFlexをおこなう場合、一番問題になるのはハウリングで、教室の改修をどうするかということが非常に大きい課題かなと思います。

オンラインの授業を続けていくとしたときに、時間割のゾーニングは難しい問題です。１限が対面、２限がオンライン、次は対面となったときに、学生たちがどこでオンライン授業を受けるのか。そこでまた密集状態が発生するとか、ネットワークへのアクセスポイント数が少ないとか、そういった課題が考えられます。それからオンライン授業でどのように教室を配当するかも考える必要があります。

東工大は実はZoom授業をライブでやって、教室があると仮定して配当しました。ですから重複履修はできなかったんですが、特に教室を仮置きしない場合、オンライン授業では重複履修ができてしまうので、どういうふうに考えるかということがあると思います。

次のところはちょっとややこしいかもしれませんが、授業科目内でのハイブリッドもあれば、複数科目間でのハイブリッドもあります。対面とオンラインをまぜようということでハイブリッドという言葉があるわけですが、それをやってはどうかという話です。授業科目の中で、例えば今週は対面、次はハイブリッド、対面のときにはHyFlexのようにZoomで参加する学生もいれば教室に来ている学生もいるし、全員がオンラインのときもあって、様々な状況が、想像以上にまざるわけです。科目の中でそれが混

在するということはありますが、複数科目間、キャンパス内でもハイブリッドなわけです。ずっと対面でやる先生がこれから出てくるかもしれませんし、大教室系の講義を特にオンラインで続ける先生もいたときに、キャンパスの中でもハイブリッドが起きているわけです。１コースの中でもハイブリッドが起きているけれども、キャンパスの中でもハイブリッドが起きているので、ゾーニングとか教室配当の問題は、もし教務担当者の方がこれを聞いておられたら頭が痛いと思います。来年度の授業実施を考えていらっしゃると思いますが、そこでは時間割ゾーニングが本当に難しくなってくるということです。

一方で、単位取得後に、例えば４年生がもう一回１年生の社会学を聞きたいなと思ったときに、聴講という意味においては、もしそれをオンラインでやれるのであれば、これまでは教室に行かなければいけなかったわけですが、単位取得後に聴講生という形ですっと入れる。あるいは必要な回のところだけシラバスを見て、12回目を聞きたいとか７回目を聞きたいとか、そういったこともできるようになるわけです。整備は必要ですが、こういったことも可能になるというのはあると思います。

教務事案として一番頭が痛いのは、高度メディア授業に関する考え方で、いわゆる60単位縛りというものです。今は緊急措置で縛りは抜けています。東工大では、昨年度、ライブ授業と組み合わせてオンデマンド授業を実施することを推進しました。そのときに実施ガイドラインをつくって、オンデマンド授業が授業回数の半分までであればそれはいわゆる対面授業の取り扱いとして、教員の授業工夫の範囲内とし、半分を超えれば高度メディア授業の60単位の中に入るという形で、ガイドラインを学内的に決めました。

そういった高度メディア授業をどう捉えるかという考え方があるので、今後は、これをきちんとつくっておかなければいけない。一回でもZoomの授業があれば高度メディア授業になると、もし60単位の縛りが生きたままであれば非常に窮屈になるので、学内規程とか実施ガイドラインを作成していくことは非常に重要な観点だと思います。

それから「お茶漬け」と書いてあるのは何かというと、いわゆる「息抜き」のようなものです。先ほど、高石先生から、前期は腕によりをかけて張り切ましたよね、皆さん、という話をいただきました。実際は、普通の対面授業の組み合わせの中には「お茶漬け」というものはないと思いますが、学生にしてみれば、ちょっと寝てしまったり、息抜きというと失礼ですが、そういった科目がなきにしもあらず、というのが正直なところかと思います。例えば、ひとつの科目でも、15回の授業を考えたときに、ギアを

抜く瞬間とか入れる瞬間とか、今日はステーキだけど明日はお茶漬け的な軽めの内容とかをうまく組み合わせてもらって、それが全学の中でもうまく見えているといいのかなというのが、教務事案としてはあるのかなと思います。

今日はキャンパスの価値や可能性についてずっと言っていますが、ここでお聞きの皆さんはそれを再発見しようと思っていらっしゃると思います**【資料②-25】**。

キャンパスとの絡みで学生が描くイメージは何かというと、例えば私たちのころは友人と話すのが大好きでしたから、授業が終わって喫茶店に行ったりして話をしました。今のオンライン実施ではそういったものはずれてしまいますが、学生サークルは自然発生的に起こるものですし、大学がどこまで自然発生を手当てするかはなかなか難しいと思います。

それからDPの見直し。Diploma policyというのはこのセミナーを聞かれている方だったら記憶にあると思いますが、Diploma policyの中ではキャンパスライフのことにちょっと触れられています。授業科目とかそれ以外の課外活動も含めて卒業して学生といったことに触れていますが、それがCurriculum policyになったときにカリキュラムは正課となって、要するに授業科目で単位さえ取ればディプロマにつながるみたいな流れになってしまいました。つまりCurriculum policyから正課外が抜けています。学士力答申を注意深く読んでいただくと、そういうふうになっています。キャンパスの価値を再発見するということについて、Diploma policyが授業科目にだけ紐付いているということであれば、ちょっと考え直さないといけなくなるのではないかなと、私は考えています。

学生支援の領域ですと、この三つ目、Safety and Inclusionのところは１年生にかかわりが深いと思います。コミュニティで大学の成員として活躍してもらうまでにInvolvement、すなわち巻き込もうという考え方があります。つまり、段階的に帰属意識を高めようということです。ですが現状では、１年生に対して、コミュニティづくりが大事だとか、そういう色々と言葉が先に躍っています。

これは学生支援のヒエラルキーのモデルですが、最初の入り口としてはSafety and Belongというキーワードがあります。大学に来てよかったなとか、キャンパスにいてよかったなとか、あるいはオンライン空間があってよかったなとか、そういう心理的安全性や、帰属意識を持ってうまく巻き込んで、そしてInvolvementにだんだんつなげていく、その後に大学の一員にしていくんだという考え方があります。コミュニティからいきなり入るのではなく、１年生にどういうふうに帰属意識を持たせるかということ

は非常に重要な観点かなと思います。

その上のほうにはStudent Services、Student Development、Student Learningと出ていますが、これは学生支援の組織を性格別に分けた用語です。あまり深くは触れませんが、Student Learningはかなり教育に近いです。例えばボランティアセンターのように学生支援ではあるけれども教育に近いものです。Student Servicesのほうは奨学金等のサービスと考えていただければ、よくわかると思います。Student Learningのほうは今大打撃を受けているので、ここをどう回復するかということが課題です。

ですから学生は学習者だという認識が非常に重要かなと思います。例えばHyFlexをやるときに、カメラの位置とかそういうものは先生がやるものだ、あるいはTAがやるものだということではなく、履修している学生も教室にいるわけですから、先生のHyFlexを手伝うとか、先ほど仲間だと言いましたが、先生も学生も同じHyFlex授業をやっていく仲間だということで、うまくそういうふうにつくっていくことが必要ではないかという考え方のもと学生の学修支援をしようということです。

初年次からはちょっと外れますが、そういった初年次の学生たちを支えるためにというふうにすれば、教職員支援は非常に重要になります**【資料②-26】**。一番大事なのは、多分ウェルビーイング、すなわち教職員の健康だと思います。

「B層」というのは、これまで教育にあまり強い関心がなかった教員を意味しています。特に研究大学だと少しいらっしゃるんですが、ひとまず授業やっていればいいと思われていた方々が、オンライン授業実施となったときに、どういうふうにやればいいんだと考えたのをきっかけに、教育に目覚められたというケースがあります。そういったB層が出現しているので、教育への熱心さがあるうちに関わっていくのが大事ではないかということです。

非常勤の教員や、職員の方々のケアも大事です。例えば、職員の方々は事務室でリモートのZoom会議は非常に受けにくい。一方で、教員は個室を持っています。ですからその辺が教職員支援としては非常に大事な点ではないかと思っています。

最後に、「ハビトゥス」という言葉をまとめにかえて置いています。実際、コロナ禍が起こる前の状態に戻るという志向性が無意識のうちにあるらしいのです。今、人口密集地域との認識差は既にあるのかもしれませんが、コロナ禍ってあったよねといった感じで、対面授業にずるずるずるっと戻っていく可能性もあります。ここが分岐点になってしまうのです。顕在化した課題を糧に大学教育を変えていくのが私たちですが、実は

変えないかもしれないという可能性もあり、Preコロナ的な状態に戻ってしまうということが起こり得るのではないかと思っています。一方で、今浮上してきているいろいろな課題を糧に何かを考えれば、大学教育を変えていくことが私たちには可能性としてある。どちらを選ぶかということです。

今、議論はShould、Would、つまり「べき論」と、「何をしたい論」が多い。何が起こり得るので、そうなるんだったら今こうしようといった発想から、つまり、Couldから導くシナリオづくりが重要ではないかと思っている次第です。以上です。ありがとうございました。

資料

〔資料②-1〕

COVID-19であらわになった日本の大学教育

田中 岳

〔資料②-2〕

教育革新センター（Center for Innovative Teaching and Learning）概要

Tokyo Tech

目的

「東京工業大学の教育・研究理念と戦略に基づき，教育方法，教育能力開発方法，教育支援方法及び教育の質向上のための教育マネジメント体制の革新及びその継続的実践により，教授力及び教育意識の高い教員並びに学習意欲にあふれ学力及び人間力が高い学生の育成を図り，世界最高の理工系総合大学の実現に資することを目的とする。」（東京工業大学教育革新センター規則第2条）

教育の質保証体制の構築

- ○授業評価アンケートの企画・実施
- ○授業評価アンケート結果のフィードバック
- ○カリキュラム評価の企画
- ○学生の学修行動分析
- ○マネジメント体制の構築支援

教育能力開発及び向上支援

- ○教員・職員・TAを対象とした研修の企画・実施
- ○英語による教授法の向上支援
- ○動画を活用した教授法の向上支援
- ○各種ハンドブックの作成
- ○授業コンサルテーション，学修サポート

教育学習環境の開発及び教育支援

- ○MOOC（Massive Open Online Course）開発
- ○オンライン教材を活用できる環境整備
- ○教室環境コンサルテーション

教育方法の研究開発及びその普及

- ○効果的な講義法の開発
- ○アクティブ・ラーニングの推進
- ○ICTを活用した効果的な教授・学習法の開発

【概算要求事業】

- ●GSA: 教職員と学生ならびに学生間の協働による学びのコミュニティシステムの確立（平成28~32年度）
- ●LPG: 学生が自ら進んで学べるプラットフォームの構築による教育改革の更なる推進（平成29~33年度）

〔資料②-3〕

共同通信:
対面授業が半数未満の大学名公表　文科省、11月上旬に

2020/10/16 12:23 updated

　文部科学省は16日、新型コロナウイルスの影響で遠隔授業を続ける大学が多いとして、対面授業の割合が半数に満たない大学の状況を調べ、来月上旬に大学名を公表すると発表した。
　萩生田光一文科相は同日の閣議後記者会見で「遠隔と対面のハイブリッドの授業をやってもらいたいとお願いしてきたが、対面が再開できていないとの声がある」と述べ、対面授業の実施を促した。

https://this.kiji.is/689671352527668321

3

〔資料②-4〕

読売新聞オンライン:
大学の対面授業「再開を」７割…読売世論調査

2020/10/18 22:01

　読売新聞社が１６～１８日に実施した全国世論調査で、新型コロナウイルスの影響でオンライン授業が続いている大学に対し、政府が対面授業の再開を求めていることについて聞くと、できるだけ再開すべきだと「思う」人は７０％に上った。「思わない」は２２％だった。

https://www.yomiuri.co.jp/election/yoron-chosa/20201018-OYT1T50183/

4

〔資料②-5〕

対面授業再開≠キャンパスライフ回復

地域差

5

〔資料②-6〕

今日の話題

- **はじめに**
- **実は既にコロナ禍だった**
  - 武漢の光景
  - 遠隔授業スタートと対面授業キャンセル
  - 『[POD] COVID-19/remote teaching advice for faculty?』
  - 日本では
- **コロナ禍の真っただ中へ**
  - 大岡山では
  - 仲間の大学では
- **経験を経て: 大学教育への私見**

6

〔資料②-7〕

武漢の光景

01/24/2020, 封城后的24小时, “空城”武汉的物价、交通 、生活真实状况记录
https://youtu.be/MikbHr3sGJ8

〔資料②-8〕

遠隔授業スタートと対面授業キャンセル

- 中国名門大、遠隔教育を本格導入　新型肺炎で、26万人参加
  https://this.kiji.is/606406150736479329
  共同通信 **2020/02/29** 17:53 updated
- U. of Washington Cancels In-Person Classes, Becoming First Major U.S. Institution to Do So Amid Coronavirus Fears
  https://www.chronicle.com/article/U-of-Washington-Cancels/248198/
  Chronicle of Higher Education **2020/03/06**
- Stanford’s response to COVID-19
  https://president.stanford.edu/2020/03/05/stanfords-response-to-covid-19/
  2020/03/05

8

〔資料②-9〕

[POD] COVID-19/remote teaching advice for faculty?

- 日本時間02/27未明の投稿
- この投稿者が気にかけたのは，「Los Angeles Times」に掲載されたCDC Director Nancy Messonnier 氏のコメント

"Ultimately, we expect we will see coronavirus spread in this country," said CDC Director Nancy Messonnier. "It's not so much a question of if, but a question of when."

Messonnier advised parents to **talk to schools about the possibility of internet-based learning** in the event that **COVID-19 spreads and students would need to refrain from attending classes in a school building**,

Feb. 25, 2020, Los Angeles Times: Coronavirus spread in U.S. is inevitable, CDC warns. It's 'a question of when'

https://www.latimes.com/california/story/2020-02-25/cdc-warns-public-to-prepare-for-likely-spread-of-coronavirus

9

〔資料②-10〕

日本では（2月下旬~3月上旬）

- 2月27日には，全国の小中高等に対して3月2日からの臨時休校が要請され，その頃から卒業式の中止や規模縮小が大学等で話題に。また入学式，新年度オリエンテーション等については様子見といった雰囲気が漂い始める。
- 日本教育工学会がオンラインにより学会を開催（2020年春季全国大会(第36回)：2020年2月29日（土）～3月1日（日）於 信州大学）
  - 信州大学次世代型学び研究開発センター：学会全国大会のオンラインでの試行開催の運用メモ

https://cril-shinshu-u.info/archives/1473

- **CITLでは，オンライン教育（遠隔授業）による授業実施の可能性について議論を開始。授業開始を延期するのか，暦通り開始するのかという二択ではない，第3の選択肢としての「オンライン教育（遠隔授業）」。**

10

〔資料②-11〕

日本では（3月中旬~下旬）

- 名古屋商科大学 03/12
- 東京大学 03/18
- 国際教養大学 03/19
- 国際基督教大学 03/23

- **東京工業大学 03/24:【学士課程新入生の皆さまへ】2020年度第1Qの授業実施について**

- 文部科学省 03/24: 令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）

https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf

11

〔資料②-12〕

コロナ禍の真っただ中へ

12

〔資料②-13〕

大岡山では（3月上旬~4月上旬）

- Zoomとの打合せ 03/10
- オンライン授業実施に向け諸課題と取り組む日々
  - 例えば，
- CITLセミナー <Zoomを活用した遠隔授業> 03/27
- 「Zoom Faculty Leaders」結成
- CITLウェブサイト「Zoomを活用した遠隔授業」開設
  - Zoom遠隔授業ガイド（随時更新）
  - Zoom知恵袋
  - オンライン授業の心得

https://www.citl.titech.ac.jp/resource/zoom-remote-class/

- **04/07緊急事態宣言発令，授業開始を05/04へ**

13

〔資料②-14〕

心得に込めた思い

- オンライン授業の心得 04/09 Ver.3 CITLウェブサイト公開
  - 初のオンライン授業は，バージョン1.0（あるいはベータ版）くらいに考えましょう。最初から，完璧な授業設計（1コマ1コマの授業，また授業科目全体）はありません。まして，**実際の教室授業をオンライン授業で再現することには無理**があります。オンライン授業には，オンライン授業の良さがあると思い直すことを基本にしてお読みください。
  - 多くの授業をオンラインで履修することは，学生にとって新たな経験です。教員もそうです。そうした意味で，**互いに初心者である（新たな経験をする学習者である）**ことについて認め合うことが肝要です。
  - 教員からの何気ない歩み寄りで救われる学生がいることを忘れないようにしましょう。**思えば，特にこの新年度4月の入学生（現役）は，新型コロナウイルスの影響による休校で，授業も卒業式も母校である高校で実施・挙行されることなく，入学先での大学にて入学式が行われることも少なかった世代になります。換言すれば，初年次教育がこれほど大事になる世代は，大学教育において初のこともかもしれません。**

14

〔資料②-15〕

生徒側へのフォロー以外に教育のICT化において注目しておきたいのは、教員側のICT対応だ。そのためには、たとえば導入されるコンピュータやインフラは教員が簡単にメンテナンスできる（あるいはメンテナンスをお願いできる環境の）ものが好ましいだろう。コンピュータを含めたICT化に慣れていない教員がいた場合は、教員へのICT教育を準備する必要もあるかもしれない。

このように、教育のICT化というのは、環境整備を進めるにあたってコンテンツのデジタル化以外の部分にも注視しておくことが大事…

教育のICT化の現状とこれから～ICT化からICT活用への意識変化を
https://edutmrrw.jp/2018/technology/0323_ict_education

〔資料②-16〕

大岡山では（4月中旬~7月上旬）

- 授業学修アンケートのウェブ実施準備
- 05/12副学院長等教育会議
  - 大過なく
  - 関心:
- 「HyFlex Model」の検討
  - 東京
  - 第2Q（06/22~08/08）
- 現況調査: 6月上旬実施「COVID-19対応によるオンライン授業等の受講・学習・生活状況アンケート調査」
  https://www.citl.titech.ac.jp/online_questionnaire/
  - 調査結果を受け第2Q以降の授業改善について教員へ通知（07/09）
  ①課題の量 ②授業後のストリーミング視聴 ③授業中の休憩時間 ④通信環境への配慮 ⑤ビデオON/OFF ⑥成績評価 ⑦授業後の質問機会

16

〔資料②-17〕

不発の「HyFlex」（5月）

- 「HyFlex Model」の検討メモより
  - 教育現場にも求められる「ソーシャル・ディスタンシング」。記事冒頭には，"back to normal or fully remote"といった2択的な思考停止から離れ，いわば第3の選択としての"HyFlex"というアイディアが見えます。
  - そもそもの"HyFlex"は，遠隔教育の効果（解決策）として期待されたモデルではないようです。キャンパスに住む寮生と近隣から通学する（キャンパス近くに住む）学生がクラスに混在している場合に，実際の教室でライブ授業に参画しても，オンラインで授業にライブまたはオンデマンド参画しても，どちらも可（学生が選べる）という柔軟性を担保しようとしたモデルのようです。その柔軟性が，今般の教室における「ソーシャル・ディスタンシング」に効いてきそうかも，と注目されているわけです。教室から履修学生数を間引く必要があるからです。

May 10, 2020, Inside Higher Ed
Fall Scenario #13: A HyFlex Model
https://insidehighered.com/blogs/learning-innovation/fall-scenario-13-hyflex-model

17

〔資料②-18〕

08/03/2020, In-Person Teaching with Remote Students
https://youtu.be/65vJkOcIG-8

〔資料②-19〕

大岡山では（7月中旬~8月上旬）

- 経験調査: 8月上旬実施
  - 「オンライン授業および学習観に関するアンケート調査（学生対象）」
  - 「オンライン授業および授業観に関するアンケート調査（教員対象）」

https://www.citl.titech.ac.jp/ に掲載準備中

19

〔資料②-20〕

大岡山では（9月~）

- **教育革新シンポジウム 2020**

https://www.citl.titech.ac.jp/citlsympo2020/

■第1回「東工大オンライン授業のグッドプラクティス 1」
日時：2020年10月06日(火)10:25～12:15
場所：オンライン（ZOOM）
対象：本学教職員（非常勤講師含む）

■第2回「東工大オンライン授業のグッドプラクティス 2」
日時：2020年11月13日(金)14:25～16:15
場所：オンライン（ZOOM）
対象：本学教職員（非常勤講師含む）

■第3回「学生のエンゲージメントを高める授業づくり 2」
日時：2020年12月中下旬頃
場所：オンライン（ZOOM）
対象：本学教職員及び学生，大学教育に関心のある方

20

〔資料②-21〕

仲間の大学では

21

〔資料②-22〕

経験を経て

22

〔資料②-23〕

大学教育への私見（1/4）

- 教室対面授業の代替で始まった「オンライン授業」の可能性
  - 大教室の最前列に横一列で学生が座っている状態
  - 教員と学生双方の声が届く（伝わるわけではない）
  - 縦横に時空を超えるオンライン空間（教材の拡張）
  - 学習の個別化・習慣化（一方でボッチ学生がもつ孤独・孤立感の増幅）
  - 一体感と臨場感を磨けば更に改善が見込めるライブ型オンライン授業
  - オンデマンド型の意義（反復視聴，個別学習の促進）
  - 成績評価にテストを採用してきた教員の混乱（学生も）
  - 経済力と意欲の差が顕在化
  - 1年生の"学びほぐし"（異なる学習方法の未獲得，モチベーション低下でスタディサプリ型受験勉強の延長）
  - 1年生は大学"学習スキル"獲得がままならない中での課題レポート等作成
  - 初年次学生等の移行支援（従前の学習支援をオンライン化）
  - 授業の事前事後や休憩時間のたむろを再現（開放オフィスアワー）

23

〔資料②-24〕

大学教育への私見（2/4）

- 「オンライン授業」から見える教室対面授業の可能性
  - 実験系科目での"片付け"から学生が学ぶこと
  - 実習・実技系科目の順次性見直し
  - COIL（対面前提こそ必要な緊急避難的代替措置）
  - 教育寮
- 教務事案
  - 学内ICTインフラ（BYODを含む）
  - ハイフレックス実施でのハウリング（教室改修）
  - オンライン授業科目の時間割ゾーニングと教室配当（重複履修▽授業科目内でのハイブリッドもあれば，複数科目間でもハイブリッド）
  - 単位取得後の積極的オンライン聴講
  - 高度メディア授業に関する考え方（学内規程や実施ガイドライン作成）
  - お茶漬け

24

〔資料②-25〕

大学教育への私見（3/4）

- キャンパスの可能性
  - キャンパスの価値再発見（”売り”にしてきた大学も）
  - 学生が描くイメージとのずれ（自然発生だった学生サークル）
  - 見直されるDP？
- 学生支援
  - 学生は学習者（≠消費者）
  - Student Services, Student Development, Student Learning

    Manning, K., Kinzie, J. and Schuh, J. H. 2006, One Size Does Not Fit All: Traditional and Innovation Models of Student Affairs Practice. New York: Routledge.
  - Safety and Inclusion => Involvement => Community

    Strange, C. C. 2003, "Dynamics of Campus Environments", Komives, S. R., Woodard Jr., D. B. and Associates, Student Services: A Handbook for the Profession. 4th edition, San Francisco: Jossey-Bass Publishers.

25

〔資料②-26〕

大学教育への私見（4/4）

- 教職員支援（FD・SD）
  - ウェルビーイング
  - B層の出現（熱いうちに打て）
  - 非常勤へのケア
  - 職員の職務環境

■「ハビトゥス」
- 無意識の志向性（元に戻る）
- コロナ禍ってあったよね（実際，人口密集地域との認識差は既に？）
- 顕在化した課題を糧に私達は大学教育を変えるかもしれないし，変えないかもしれない
- Should, Wouldではなく，Could（起こり得ること）から導くシナリオ

26

〔資料②-27〕

〔資料②-28〕

01/29/2013, 教室でSkype：世界をつなぐ教育サイト『Skype in the classroom』
https://youtu.be/LxPK-lBhUmA

第　2　部

パネルディスカッション

パネルディスカッション

（司会・竹内） お待たせいたしました。時間となりましたので、ただいまより質疑応答に入りたいと思います。いただいた質問について、両先生へのお問いかけなどをしながら、それをもとにディスカッションができればよいと思っています。

質問１

（司会・竹内） 両先生にいろいろな質問が届いていますが、まず、先ほど出ておりましたHyFlexについて、田中先生宛のご質問からまいりたいと思います。「緊急遠隔授業が一段落した上でHyFlex授業に向かう現状ということで、一度立ちどまって別の選択肢をとったほうがよいのか、もしくはその努力の継続を進める必要があるとすれば、最もリソースを振り分けるのは設備投資なのか、それとも教員の研修や教育支援の体制なのか、あるいは授業・学修の設計なのか。その辺、どのように取り組めばよいとお考えでしょうか」というご質問です。これについて、田中先生、お願いできますか。

（田中） 難しい質問をありがとうございます。難しいですね、HyFlexは。授業をやるには本当に難しいです。いろいろなトライをされている状況は、ここでお聞きの皆さんご承知のとおりです。例の２万人Facebook Groupの中でも、こういうふうにやりましたという事例が紹介されていて、例えば体育の授業なども、バスケットボールをやっているのと、それを見ている体育館の前のスクリーンを設けるという形でやりましたとか、いろいろなトライをされている先生方がいて、非常にありがたいと思います。それは緊急でひとまずやってみたことですが、緊急の状態が終わったときにどういうふうな方向に行くのか、これは難しいですね。

私は基本的に、HyFlexは、この一段落したところでの選択肢で行うのであれば、大授業に向いていると思います。体育のバスケットボールは、いくらか対面が可能になれば、多分、全員対面になって、HyFlexにはなかなかならないと思います。研究室系のゼミ、３、４年生のゼミみたいなものは、例えば東京に就職活動に行っている間はZoomで参加して、実際のゼミ上で話をするというようなことが可能になるのは、変わらないでしょう。本来であれば、大教室の授業、講義系のものは多分オンライン実施のほうがいいと思います。

ですが一段落した状況で考えれば、学生にキャンパスみたいなものを実感してもらおうということで、例えば90人のクラスを30、30、30のA～Cのグループに分けて、Aのクラスが対面授業で来ているときはBとCはZoomという形をとる。これは、ご質問にあるとおり緊急避難的なHyFlex対応としては考えられます。

しかしその90人の授業を対面でやるかオンラインの講義としてやるかと考えたときには、今の個人的な発想でしたら、HyFlexをやらずにオンラインの講義を勧めます。そこの部分において、どういう授業にはどういうものが推奨ですよといったものは、ガイドラインとして大学側が設定しなければいけないというのが、いわゆる文科省が好きな教育マネジメントになるのかもしれませんが。

先ほど言ったように、HyFlexは本当にハウリング問題が大きい。でも小さい教室で、例えばヤマハの大きい、いわゆるおにぎり型のスピーカーであれば、多少の広さでHyFlexは可能ですし、ウエブカメラも広角のすごくいいものを使えば、狭い教室であれば対応できるので、設備投資にそんなにお金は要りません。ただ、先生方が自腹でやっていらっしゃる場合があるので、大学がきちんと手当てできるようにしたほうがいいし、質問者の方がお書きのとおり、そういう授業をどのようにやるかという研修は必要だと思います。

研修は結構難しくて、どういう実態になったかというお披露目をする感じで、授業をやられた方から何か聞くほうが、多分先生方に届くと思います。いわゆるファカルティーデベロッパーがこうですよみたいな感じで一つのスタイルをやるよりは、そういった教員も相互研修のほうが大事かなと思います。

あとは、そういうものに巻き込むのであれば、先ほど言った、非常勤の先生方をどうするかというのをちょっと考えておかないといけないと思います。どんぴしゃで答えにくいですが、この質問の中からはそんなことを感じ取りました。せっかくご質問いただいたのに、申しわけありませんが、これでちょっとご勘弁ください。

（司会・竹内） 田中先生、ありがとうございました。

質問２

（司会・竹内） それでは次に高石先生に質問を振らせていただきます。「新入生が何をどう聞いたらよいのかわからず、未解決の問題や不全感が蓄積しており諦めている場合

もあるということですが、こういった場合にどのようなアプローチをとったらよいのか悩んでおります。成績不振者ですとわかりやすいのですが、それ以外の学生にも当てはまると思います。学生に対するアプローチの仕方としてよいアイデアがあれば教えていただければと思います」という質問ですが、高石先生、いかがでしょうか。

（高石） どの１年生にもぴったりという言葉がけは難しいかと思うんですが、ともかく、諦めかけているとか困っているということをキャッチされた先生なり職員の方がいらっしゃったら、相談室とか個別に対応できる部署につないでいただくことが第一かなと思います。

相談室に行きましょうと言っても、この状況ではなかなか行きづらく抵抗がある場合には、まずは教職員の方が、こういう学生がいますがどうしたらいいかということで個別にカウンセラーに相談を持ちかけていただくところから、ちょっと状況がわかってくると思います。そこでいろいろ試してもうまくいかないときは、とにかくその学生さんを伴って一緒に来ていただくというところから支援が始められると、できることはいろいろあるのかなと思います。

何をどう聞いたらいいのかわからなくて、どうしてもそのままになってしまうという背景に何があるのかということですが、そこもいろいろ見立てをしていかなければいけないと思います。ひょっとしたら、本当にスキル不足だけの問題であって、ちょっとした助言ときっかけがあればすぐに適応できるレベルの学生さんもいらっしゃるかもしれません。あるいは、昨今の学生さんにもかなり増えていますが、もともと発達障害だとかそういった傾向、特性を持っておられて、さらにこの遠隔という状況で周りのサポートもなく途方に暮れている学生さんもいらっしゃるかと思います。

あと、ご自宅にいらっしゃる場合でしたら、やはり家族関係ですね。親御さんとかきょうだいがいて、そういうことをすぐ身近に聞ける相手がいるとかいないとか、そういったいろいろな環境の複合的な結果として、ご本人が諦める、途方に暮れるということが起きてきているはずなので、まずはそのあたりで諦めずに、どこか個別対応のできるところにつないでいただいて、一緒に考えましょうと。ただし、こうしたらいいよとか、このガイドブックの何ページに書いてあるよとか、ここを読めばわかるよという助言は大体NGです。それでできるぐらいの学生さんだったら諦めてしまいませんので。

とにかくわからないところから、まず大変なんだねというところを受けとめてから、わかるところまで一緒に考えるからねと、そういう対応をしていただくと、ご本人は

ちょっとほっとして次につながっていくことが多いのではないか。体験的にはそのように思います。こうすればいいという特効薬があるわけではなく、個々に違うと思います。そんなところでよろしいでしょうか。

質問３

（司会・竹内） ありがとうございました。今の話とも関連がありそうですので、続けて高石先生に質問させていただきます。「１年生のカウンセリングをしている中で、１年生にはどんなことを言ったら心の荷が軽くなるのでしょうか。これは多分いろいろなケースあると思いますが、具体例などがありましたらご教授いただけますか」という質問です。ちょっと難しいかもしれませんが。

（高石） そうですね。私の大学で、やっと大学に来られるようになった１年生さんたちの様子を見ていると、とにかく前期は人としゃべれなかったと。やっと人と会えて、話すのがもう嬉しいと。少しでも何でも会話に飢えているという感じがひしひしと伝わってきます。そこで、とにかくよく来てくれたね、この大学にようこそ、ウエルカムだよというところから始めることだと思います。

あと、この未知の、本当に100年に一度あるかないかという社会状況の中で、あなたはこの半期にすごいことをやってきているんだよというねぎらいでしょうか。みんな大変だけどあなたもそれ以上に頑張ってきたねという、そこからではないかなと思います。

（司会・竹内） ありがとうございます。

質問４

（司会・竹内） 田中先生に質問ですが、これはご発表に出てきたＢ層についてのご質問です。「大変興味深く拝聴しましたけれども、上下にＡ層やＣ層があるのだとすれば、それはイノベーター理論（イノベーター、アーリーアダプター、アーリーマジョリティ、レイトマジョリティ、ラガード）のことでしょうか。聞き逃してしまっていたら、上下の層のことにつけ加えていただけるとありがたいです」という、質問というかご意見と

いうかをいただいておりますが、いかがでしょうか。

（田中） なるほど。多分、FDとかをやっていらっしゃって詳しい方なのかもしれませんね。B層という言葉がふさわしいかどうかわかりません。ただ、あるところで流行っていたので、ちょっと使ってしまいました。

この方の質問をもう少しかみ砕いて、FDとかこういうものに詳しくない方にもわかるように言うと、マーケティング理論で、イノベーターが組織に2.5％いると。アーリーアダプターが13.5％いると。だから、最初にこの2.5％と13.5％の16％に火をつけたら、例えば教育改善だとかそういったものがごろっと動き始めるという言い方をします。

あとマジョリティがいて、アーリーマジョリティとレイトマジョリティがそれぞれ30％程度ぐらいいる。でも何をやっても動かない人がラガードということで２割ぐらいいるのではないかと言われています。

今、FDや、こういうセミナーなどでも全部そうですが、関心の高い人、つまりイノベーターやアーリーアダプターが参加され持ち帰られて、マジョリティをうまく巻き込めない状態でFDが学内で進んでしまいます。FDをやっているほうはやっているほうでどんどん先鋭化していって、高レベルなものをやることになる。HyFlexなんて普通にできないのに、もっと地べたというか、もっと地に足のついたFDが必要なのに、HyFlexの授業をどうするかといったFDをどうしてもやってしまう。そういう乖離が生まれるわけです。

そういう点において、今回のオンライン授業は、イノベーター、アーリーアダプター、アーリーマジョリティの2.5、13.5、その次の３割ぐらい、次の３割の人たちがすごく発言しやすくなった。情報交換をして非常に活動的になって顕在化したという感じがします。その人たちがまた自分の研究室に閉じこもってしまったり、先端的なとがったFDを嫌って自分の授業だけの工夫に閉じてしまったりしてまた潜ってしまうのはもったいないので、そこをうまく拾い上げていけば、教育にかなり関心の高い５割の人たちを顕在化できるという意味で理解していただけたらいいかなと思います。

その辺、私のほうは、この方の質問を足がかりに、こういうのを初めて聞いた方に届けるような形で質問に答えさせていただきました。

（司会・竹内） 大変詳しいお答えをいただいて、ありがとうございました。私も、なる

ほど、そうだったのかと、随分勉強になりました。

質問５

（司会・竹内） 田中先生にもう１件続けてご質問です。「オンライン講義の中で、学生に教えるではなくて学ばせるための取り組み事例が何かあれば教えてください」という質問が来ています。

（田中） 学ばせる形？

（司会・竹内） はい。教えるではなくて、学ばせるための取り組み事例などがありましたらお教えくださいという質問です。

（田中） オンライン授業でやりがちなのは、教えるというより教え込むタイプですよね。

（司会・竹内） そうですね。

（田中） 教え込むほうですね。学ばせるというのはまだ使役動詞が入っているので、学生がみずから学んでいるかのように見えるけれども、教員側がかなり計画を練っているような状態だと思います。エンゲージメントでもそうだと思います。グループワークをうまく使うか、あるいは最初は講義の部分をうまく使って、後でZoomの授業をしなくても、学生たちが自由にインディペンデントスタディで交流をして、発表だけの回で、もう一回共有するということはあり得ます。しかし急に放置するとまずい。

学びに対して関心を持てるようにということで、私が授業の心得で紹介したのはブックエンドモデルですが、活動と内容をうまく組み合わせていきます。そういったものを最初にうまくやって、学生たちが発言してよいとか安全だとかいう雰囲気をうまくつくり込んでいって、その後にグルーピングしてレビューセッションを重ねて、例えば、じゃあ３週目は授業をやらないからこの課題をグループでちょっとやってきなさいと。そして５週目にプレゼンをやろうというふうに、学生を信じて学んできてもらうようなことはあり得るかもしれません。

そのときに、教員が評価するよりもピアの評価のほうが大事なので、学生間で評価す

る。そしていい悪いをつけないことが大切です。プレゼンをやらせると、できたものがいいか悪いかをどうしても評価しがちですが、悪くても次の発表をどうしたらいいかという振り返りが大事なので、そういったことと組み合わせて、学習がおもしろいというふうに持っていける授業設計があるような気がします。

質問6

（司会・竹内） ありがとうございます。今、かなり具体的な教育に関する処方論みたいな話が続いたところですが、両先生のプレゼンの中で具体的共通の言葉として出ていたのが、今やどこにでもあるかもしれませんが、「コミュニティづくり」ということだったと思います。田中先生にも高石先生にもぜひ伺いたいなと思っているのですが、「大学のコミュニティづくりに関して、大学に来てよかったという帰属意識をもとに巻き込んでいくということでしたが、通常の春入学とは異なるこのような時期からキャンパスライフが始まる学生に帰属意識を持たせ巻き込ませるには、どのような方策が考えられるでしょうか」というご質問です。高石先生にもぜひお答えをお願いしたいと思いますので、よろしくお願いします。最初は田中先生でよろしいですか。

（田中） 高石先生がすごくいい回答を準備する時間稼ぎをしますね。

ちょっと複雑に絡んだ質問事項かなと思います。コミュニティをつくるために、まずは帰属意識を持たせて、参画させてコミュニティになっていくということなので、コミュニティづくりへのステップがかなり細かく刻んであるということを先ずは御理解いただいたらいいかなと思います。

私の前任校の話で申しわけないですが、九州大学は入学式のセレモニーみたいなものをやりました。帰属意識をどういうふうに持たせるかというのは、帰属意識を持ちましたかというアンケートをしないとわからないので、本当は何とも言えませんが、ああ、ここの学生の一員になったんだという実感を持たせるには、ああいうセレモニーって非常に大事だと思います。この時期だからいきなり授業ではなくて、ちょっとやってあげるとか、今の状況だと、先輩の学生だとか、学生間のピアサポートの活動はこういうときに生きてくると思うので、オリエンテーションをやり直すというか、そういうことも非常に大事かなと思います。

先生の個別授業でも、帰属意識を持たせる工夫として、授業設計を一旦離れることも

あり得るでしょう。私も授業設計を離れて、２クオーターの授業で実際にやりましたが、授業設計を１回潰して、もうシラバスは関係ないよ、文科省がどうこう言ったっていいんだよと言って学生と話す機会を持ちました。今この時期に大学に来るってどんなことか、この時期に学ぶとはどういうことかを、学生たちに説明しました。そして感想を聞くと、先生が自分たちにそういうふうに質問してくれて、自分たちがブレークアウトセッションをして、大学で今こうやってオンラインで学ぶ理由は何だろうといったことを考えられてよかったというコメントをもらいました。教員からは、今、オンライン授業の学習方法を先に学んでいて、この後で対面の学習方法を得るという、要は順番が変わっただけだからと最後に言ったんです。

そんなふうに、教員は、学生が学習者になっていくという帰属意識を持つためのメッセージの発信は授業を通じてできるので、組織的なセレモニーも大事だし、一教員が一個別として取り組むのも大事だと思います。そのあたりについて、大学は、「シラバスから逸脱していますね」とかではなく、ちょっと寛容になって、高石先生の言葉で言うと学生たちを包摂するというんでしょう、そういうのが大事ではないかというのが僕の感想というか、僕はそうしたいなと思います。僕が副学長であれば、前期にそういうふうに言います。

（司会・竹内） ありがとうございます。私は個人的にも全く同感です。実際にそういったことを、秋学期というか、うちでは第４タームという言い方をしますが、10月になって１年生の科目でようやく対面授業をやることになって、今、積極的に対応しています。それでもやっぱり親元にいて来られない学生もいて、それはオンラインでつないでいます。そうやっていろいろ工夫して、彼らのグループとしての意識を高めるというのをやって、よかったという評価を教員のほうでもみんな実感として持っています。

では、高石先生、同じテーマについてお願いできますか。

（高石） 大事なことは田中先生がおっしゃってくださっていると思うんですが、私の実感としても、キャンパスライフというのはやはりオンラインでは限界があって、身体性、体ということを先ほどもお話の中で例に挙げましたが、同じ場に体を持った人間としてともにいるということが大事だと思います。コミュニティにもオンラインコミュニティというのはありますが、やはりリアルなコミュニティでともにどれだけの時間を過ごすかということがとても重要になっています。半年間それが失われたわけですが、特

に新入生の場合は、半年おくれたけれどもそこに戻って少しずつやっていく必要がとてもあると思っています。

とにかく文科省も、大学は授業だけではない、全人的な成長を支援するものであり、社会に巣立っていくために人間全体を育てるんだということを再確認するという趣旨の宣言をしてくださっています。シラバスをどのように書くかというテクニカルな問題はちょっとおいておき、今も私は学内を見ていても思うんですが、学生さんたちはキャンパスには来たいけれども、別に対面授業を受けたいわけではなさそうです。大学に来て、結局、対面以外の遠隔授業で学内のアクセスポイントに友達と並んで座って、それぞれ別の授業を楽しそうに受けています。それが終わったらちょっとお茶してみたいな、そのことの大事さですよね。

結局、帰属意識とかアイデンティティとかそういうものは、君は何々大学の学生になったんだからみたいな上意下達で成立するものではなく、どれだけの時間と場を共有したか、それもリアルに、というところが相当大きな要素になっている。それを省略することはできないと思っています。今からでも、そういうところはぜひ積極的に正課内でもできることがたくさんあるので、やっていけたらと思います。

（司会・竹内）ありがとうございます。両先生から具体性のある、とても学びの多いお話をいただいたかなと思います。

質問７

（司会・竹内） それから、いただいた質問で、私も同じようなことを経験していますが、対面授業をやってほしいという声があって、対面にすると、今度は、対面授業に出席することを心配する学生がやはり出てきます。実際、私も演習とか実習的な授業でコンピュータの操作をいろいろやる授業だったものですから、これは１回対面でやったほうがいいなと思って、対面授業をやりました。ところが何人かの学生は、出席するためには、例えばラッシュアワーに電車に乗らなければいけないので、その時間帯には行けないから欠席したいと言ってきました。

これは高石先生と田中先生のお２人に伺いたい質問ということで扱わせていただければと思うんですが、「感染リスクを忌避し、対面授業への出席を懸念する学生や保護者に対して、どのような回答をされますか」ということです。これについては、恐縮ですが、高石先生のほうからお願いしてもよろしいでしょうか。

（高石） 実際、本学でもそういうケースはあります。そういうケースが出てくるということも想定されたので、後期が始まる前に、大学として一定の条件を満たす場合、例えばご家族に高齢者がいらっしゃるとか、持病のある方がいらっしゃるとか、そういった条件を幾つか設定して、それを満たす場合には、コロナでの特別な配慮申請を出せる仕組みをつくりました。それを各学部の事務室に届け出すると、個別に遠隔で受講を認めるという対応をまずしています。

あと、学生さんご本人に、体だけではなく、心の部分に関しても何かしら病があるとかご事情がある場合には、学内の修学支援部署に相談に行っていただいて、そこで配慮の申請をしていただいて、個別にどのような対応が可能かを、各受講科目についてコーディネーターと一緒に検討するということをやっています。

学生相談室に来られた場合には、学生相談室のカウンセラーが意見書という名前で、医師の診断書ほどの効力はありませんが、その学生さんから背景事情の聞き取りをして、客観的にカウンセラーとしてこのような配慮が妥当であるという意見書を出させていただきます。そういった幾つかの種類の根拠資料をもって、個別に配慮の検討をするということで進めています。私どもの考えとしては、一人一人の不安のあり方は客観的にはかれないものがあるので、個別に丁寧に受けとめて、対応を考えるということになります。

ただ、中には、遠いのを通うのも面倒くさいといった、やはりちょっとサボりたいなみたいな学生さんもゼロとは言えませんので、一定の手続と客観的な資料を添えてということで、個別に対応させていただいているところです。特にそのことでトラブルになったことは、今までのところ聞いていません。

（司会・竹内） 大変具体性のある丁寧なご回答をありがとうございました。田中先生、この問題はいかがでしょうか。

（田中） 東工大は今、新型コロナウイルス感染症への対応レベルとしては〈レベル２－〉で、一応授業としては、講義は全部オンライン、実験ではいろいろなレギュレーションを設けて、それを示して、学生たちが来ているという状況になっています。しかし留学生とかは来られませんし、感染リスクを懸念してというか、物理的に来られない学生たちもいるので、そこは配慮しているというのが実情だと思います。

この問題を懸念している教員もいると思うので、これはなかなか難しい。高石先生の

ような細かい配慮もあるかとは思いますが、東工大の場合、４月の段階で、学長が東工大の全教職員、全学生の命を守るという宣言をして、そこに準じて活動しているので、今は配慮していますというぐらいしか言えません。なのでHyFlexみたいな話になるわけですが、そこから一足飛びにHyFlexに行かないほうがいいような気はします。80人のクラスで、５人が来られないといって、５人にHyFlexをやるということは結構難しいのかなと思います。具体的には、ちょっと何ともいい回答は準備できません。

（司会・竹内） ありがとうございました。それぞれのキャンパスの環境によって、この問題は随分違っていると思います。もちろん、教育内容とか実験が多いのか、それとも普通の講義が多いのかといったようなことでも当然対応は変わってくると思います。一律にこのやり方がベストというのは、多分ないだろうなというような気がいたします。

いろいろとご質問いただいて、ディスカッションといいながら質問に答えているだけで予定の時間は過ぎていて、もうほとんど時間がなくなりました。本当は、すごく伺いたいことがあるんですが、ここで聞いてはいけませんねというところで、ちょっと我慢したいと思います。オンタイムに終わることを主催者としては優先させていただきます。

本日は、両先生には熱のこもったお話をしていただき学ぶところが多かったなと、本当に感謝しています。ご参加の皆さんから両先生に拍手を送ることで、感謝の意を表させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

（高石） ありがとうございました。

（田中） ありがとうございました。

（拍手）

（ご所属等はご講演時のものです）

講演者等略歴

高石　恭子（たかいし　きょうこ）

甲南大学文学部教授。京都大学教育学部教育心理学科卒業、同大学院教育学研究科博士後期課程単位取得満期退学。京都大学博士（教育学）。1992年甲南大学文学部専任講師、1996年同大学助教授、2003年同大学教授。学生相談室専任カウンセラーで臨床心理士、大学カウンセラー、公認心理師の資格を持つ。2019年から日本学生相談学会（国内）理事長。

田中　岳（たなか　がく）

東京工業大学教育革新センター教授。大学卒業後、会社勤務等を経て、京都精華大学職員。2009年３月名古屋大学大学院教育発達科学研究科（高等教育マネジメント）博士後期（Ed. D）課程単位取得退学。2008年４月九州大学教育改革企画支援室准教授に着任。2012年10月基幹教育院教育企画開発部准教授。2016年４月より現職。2017年度からは副センター長。

竹内　比呂也（たけうち　ひろや）

千葉大学副学長（学修支援）、附属図書館長、アカデミック・リンク・センター長、人文科学研究院教授。図書館情報学専攻。著書に『図書館サービス論（共著）』『図書館はまちの真ん中（共著）』『変わりゆく大学図書館（共編著）』などがある。

ALPS ブックレット シリーズ　vol.6

千葉大学ALPSプログラム 第６回シンポジウム

新型コロナ禍の下での教育・学修支援
－新入生への支援に留意して－

令和３年３月１日発行

発　行　者：千葉大学アカデミック・リンク・センター
（教育関係共同利用拠点（教育・学修支援専門職を養成する実践的SDプログラムの開発・運営拠点））
〒263-8522　千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33
ＴＥＬ：043-290-2243
MAIL：alps-info@chiba-u.jp
表紙デザイン：西原　朝子 ／ 印刷：株式会社 正文社

Academic Link